

秋田県文化財調査報告書第344集

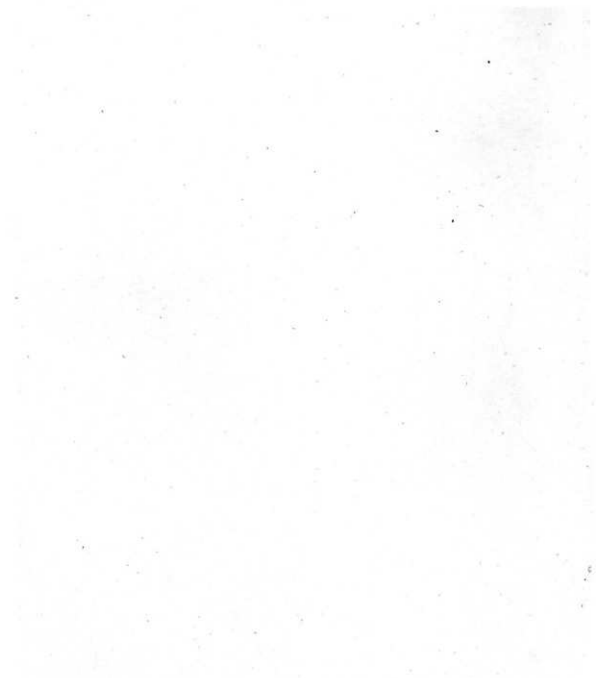
小 林 遺 跡 I

縄 文 時 代 編

－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIV－

2002・7

秋 田 県 教 育 委 員 会



シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩俣」です。

縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7 cm、凝灰岩。

こ ばやし い せ き 小 林 遺 跡 I

縄 文 時 代 編

－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIV－

2002・7

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設に先立って、平成12年度に琴丘町で実施した小林遺跡の発掘調査成果のうち縄文時代についてまとめたものであります。調査では、縄文時代中期の堅穴住居跡などが発見され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました日本道路公団東北支社秋田工事事務所、琴丘町教育委員会、五城目町教育委員会、八郎潟町教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成14年7月

秋田県教育委員会

教育長 小 野 寺 清

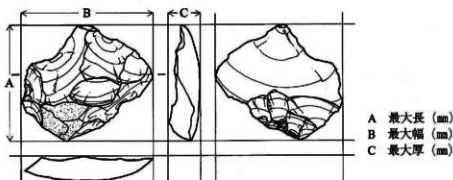
例 言

- 1 本書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、2000（平成12）年度に調査された秋田県山本郡琴丘町に所在する小林遺跡の調査結果のうち、縄文時代の遺構・遺物の報告を収めたもので、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財報告書としては14冊目にあたる。
- 3 調査内容については、一部が年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
- 4 本書の執筆は、第2章第1節を渡邊慎一が、他を吉川耕太郎が担当し、編集は吉川が行った。
- 5 本書に使用した地形図は、国土地理院1/25,000『鹿渡』・『五城目』と日本道路公団東北支社秋田工事事務所提供の1/1,000工事用図面である。
- 6 自然科学分析は、株式会社古環境研究所、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 7 遺構配置図作成・空中写真撮影は株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 8 本報告書を作成するにあたり、以下の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。

穴澤義功・鎌田久美子・木村将来・小塚裕姫子・野口 淳・斎藤浩志・佐々木公法・佐藤 啓・関 友明・半田あきほ・藤原紀敏・渡邊慎一

凡 例

- 1 遺構番号は、種類毎に略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構でないとして判断したものは欠番とした。また、遺構には下記の略記号を使用した。
SI・・・堅穴住居跡 SKT・・・陥し穴状土坑 SKF・・・フラスコ状土坑
- 2 遺跡基本土層と遺構土層中の土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（1998年版）によった。
- 3 土層番号は、原則的に、ローマ数字を遺跡基本土層に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。
- 4 石器の計測部位は、下図のとおりである。単位は、長さ・幅・厚さがmm、重量がgである。



目 次

序

例言・凡例

目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過	1
-------------	---

第2節 調査要項	1
----------	---

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地	4
--------------	---

第2節 歴史的環境	7
-----------	---

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概要	11
-----------	----

第2節 基本土層	11
----------	----

第3節 調査の方法	11
-----------	----

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構と出土遺物	17
---------------	----

(1) 竪穴住居跡	18
-----------	----

(2) 陥し穴状土坑	20
------------	----

(3) フラスコ状土坑	21
-------------	----

第2節 遺構外出土遺物	21
-------------	----

第5章 まとめ	57
---------	----

挿図目次

第1図	小林遺跡調査範囲図	2
第2図	日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡	3
第3図	小林遺跡の位置	4
第4図	小林遺跡周辺の地形	6
第5図	小林遺跡周辺の遺跡分布	9
第6図	トレンチ位置図	13
第7図	基本土層図	14
第8図	北側谷部土層断面図	15
第9図	遺構配置図(縄文時代)	17
第10図	検出遺構(1)(S I 1904)	27
第11図	S I 1904出土土器	28
第12図	S I 1904出土石器(1)	29
第13図	S I 1904出土石器(2)	30
第14図	S I 1904出土石器(3)	31
第15図	S I 1904出土石器(4)	32
第16図	S I 1904出土石器(5)	33
第17図	検出遺構(2)(S K T 121・S K T 752・S K F 93・S K F 3062)	34
第18図	遺構外出土石器(1)	35
第19図	遺構外出土石器(2)	36
第20図	遺構外出土石器(3)	37
第21図	遺構外出土石器(4)	38
第22図	遺構外出土石器(5)	39
第23図	遺構外出土石器(6)	40
第24図	遺構外出土石器(7)	41
第25図	遺構外出土石器(8)	42
第26図	遺構外出土石器(9)	43
第27図	遺構外出土石器(10)	44
第28図	遺構外出土石器(11)	45
第29図	遺構外出土石器(12)	46
第30図	遺構外出土石器(13)	47
第31図	遺構外出土石器(14)	48
第32図	遺構外出土石器(15)	49
第33図	遺構外出土石器(16)	50
第34図	素材・製品の搬出入模式図	59
第35図	遺構外出土石器組成図	60

表目次

第1表	小林遺跡周辺の遺跡一覧	10
第2表	S I 1904出土石器観察表	51
第3表	遺構外出土石器個別組成表	52
第4表	遺構外出土石器観察表(1)	53
第5表	遺構外出土石器観察表(2)	54
第6表	遺構外出土石器観察表(3)	55
第7表	遺構外出土石器観察表(4)	56

図版目次

図版1	遺跡全景(南から) 作業風景(北西から)
図版2	S I 1904確認状況(南から) S I 1904完掘状況(西から)
図版3	S I 1904炉跡検出状況(北から) S I 1904石器集中部検出状況(東から)
図版4	S K T 121完掘状況(西から) S K F 93完掘状況(南から)
図版5	S I 1904出土土器 S I 1904出土石器(個別別資料No.A)
図版6	遺構外出土石器(個別別資料No.3) 遺構外出土石器(単独個体)

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

日本海沿岸東北自動車道は、平成9年2月に新潟市～青森市までの全区間が路線の指定を受けている。秋田県におけるそれまでの路線名は、日本海沿岸東北自動車道象潟秋田線（象潟町～秋田市間）及び秋田琴丘線となっていた。小林遺跡に係る昭和町～琴丘町間の20.7kmについては、平成3年12月に整備計画区間に決定され、平成5年12月の実施計画認可を経て平成6年11月に路線が発表された。

これを受けて秋田県教育委員会は、路線上の埋蔵文化財の確認のため平成8年の9・12月に分布調査を実施し、周知の遺跡3カ所、小林遺跡を含む新たに発見した遺跡16カ所の計19遺跡であることを確認し、いずれも範囲確認調査が必要であるとの結果が出された。

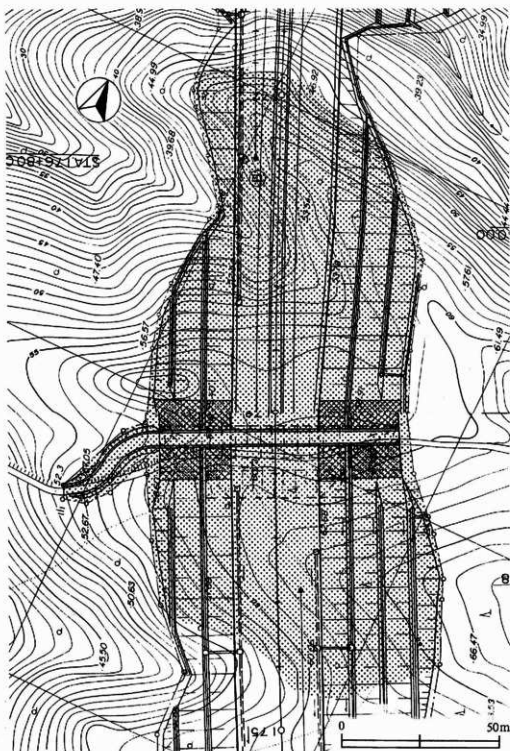
小林遺跡の範囲確認調査は18,000㎡を対象として、平成10年10月から11月にかけて実施された。その結果、堅穴住居跡・土坑・柱穴などの遺構と、土師器やフィゴの羽口、鉄滓などが多く出土し、平安時代における鍛冶関連の集落跡であることが予測された。なお、18,000㎡のうち南側の沢にあたる3,700㎡には遺構・遺物ともなく、本調査の対象範囲は14,300㎡となった。

第2節 調査要項

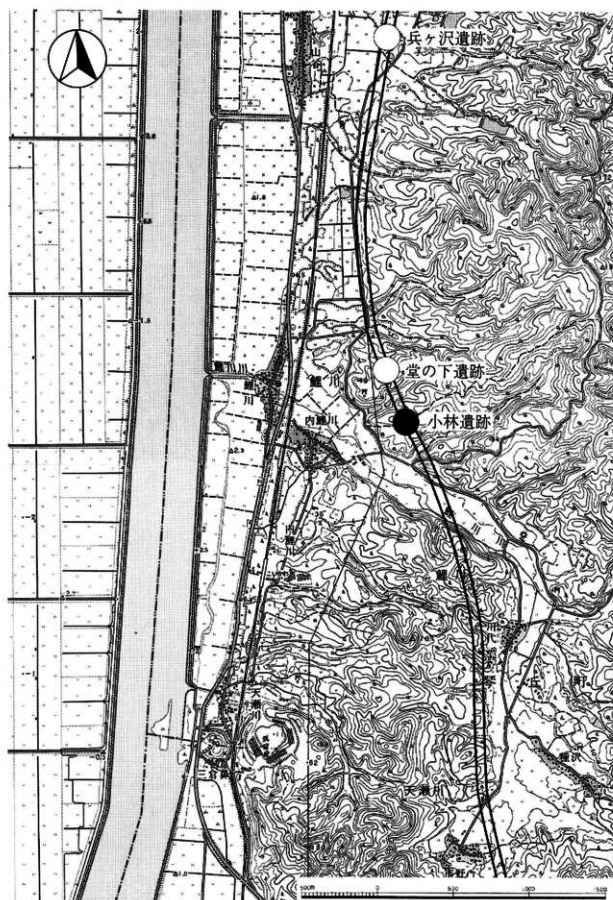
遺 跡 名	小林遺跡
所 在 地	秋田県山本郡琴丘町豊川字小林39番地外
調 査 期 間	平成11年4月24日～11月2日
調 査 目 的	日本海沿岸東北自動車道建設事業
調 査 面 積	14,300㎡
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会
調 査 担 当 者	吉川 耕太郎（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 文化財主事） 大森 浩（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 学芸主事） 藤田 賢哉（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 学芸主事） 太田 剛（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員） 菊地 亮（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員） 工藤 幸作（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員） 小澤 昌広（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員） 高橋 浩樹（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員） 播磨 芳紀（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員） 皆川 友紀子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員） 森川 千春（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課 非常勤職員）

総務担当者 土橋 謙一 (秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事)
 佐々木 敬隆 (秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事)
 八文字 隆 (秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事)
 成田 誠 (秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事)

調査協力機関 日本道路公団東北支社秋田工事事務所 琴丘町教育委員会 五城目町教育委員会
 八郎潟町教育委員会



第1図 小林遺跡調査範囲図



第2図 日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地

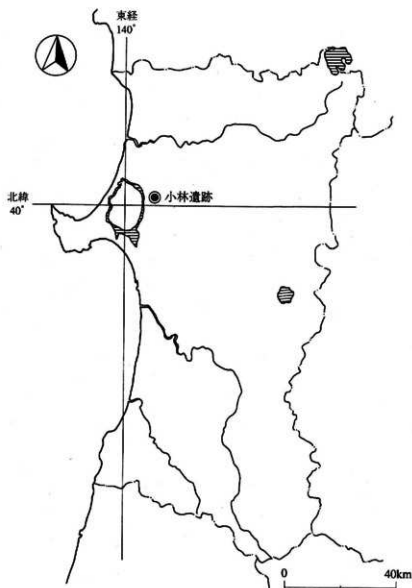
小林遺跡はJ R奥羽本線鯉川駅から北東約2kmの北緯40度00分12秒、東経140度5分33秒に位置する。

遺跡の所在する秋田県山本郡琴丘町は、八郎潟残存湖の東部、出羽丘陵北西部にある。町の西部、湖岸より約2.5km東では、標高90～200mの丘陵地が南北に走り、東側を北流する三種川上流の小又川と、この丘陵地を水源として西流し残存湖に注ぐ鯉川、鹿渡川といった小河川の分水嶺を成す。湖

岸では、北から鹿渡、鯉川、三倉鼻といった集落が湖岸のわずかな低地に沿って形成される。本遺跡は鯉川集落から東へ約1km、八郎潟残存湖岸から約1.5km東に位置する。

干拓以前の八郎潟は、陸繋島である男鹿半島を形成する二つの砂州と本州に囲まれた潟湖（ラグーン）であり、面積220.4km²、最深4.7mであった。昭和32～42年における国の直轄事業「国営八郎潟干拓事業」により、現在の姿となっている。

遺跡周辺の地形は、山地、丘陵地、台地、低地に分けられる。【土地分類基本調査 五城目】【土地分類基本調査 森岳・羽後浜田】によると、三種川上流である小又川および鯉川、鹿渡川の水源を発する丘陵地を鹿渡丘陵地としている。鹿渡丘陵地では各河川により浸食を受け形成された谷



第3図 小林遺跡の位置

底平野が発達するが、堤の構築及び水田化に伴う地形の改変が旧来から進んでいる。鹿渡丘陵地の南には森山（325.4m）、高岳山（221.4m）を中心とする森山高岳山山地が形成され、丘陵地から湖岸にかけて鹿渡台地、湖岸平野、干拓地がそれぞれ形成されている。森山高岳山山地の南では馬場目川水系による沖積低地及び干拓地が広がる。

秋田県の地質は男鹿半島に分布する地層を対比の標準としている。遺跡周辺の地質は下位から新第三紀中新世の小谷沢層、女川層、船川層、天徳寺層、鮮新世の笹岡層、第四紀更新世の潟西層、段丘堆積物、完新世の段丘堆積物、沖積低地堆積物で構成されている。山地から湖岸に向かって地質時代の古い地層から若い地層が順に重なっているが、地層が褶曲しているため、南北の褶曲軸に沿って同一層が繰り返し露出している。このため湖岸に近い丘陵地の一部では、船川層の泥岩、女川層の珪質頁岩がみられる。また、鹿渡丘陵地、森山高岳山山地にそれぞれ火山岩類がみられ、遺跡の南北にそれぞれ分布する。鹿渡丘陵地にみられる火山岩類は馬ノ松火山岩類と呼ばれており、岩種は石英安山岩、角閃石安山岩など多種にわたる。森山、高岳山では石英安山岩がみられる。

小林遺跡は、鯉川川水系により浸食を受ける鹿渡丘陵地、第四紀更新世に形成された潟西層の砂および泥層上に立地する。遺跡の標高は58～62mである。

遺跡周辺の景観では、起伏の激しい丘陵地が多く稲作に適した沖積低地が非常に少ない。このため、畑作や八郎潟での水産業といった稲作以外の産業が古くから営まれ、地域の人々の暮らしを支えてきたことが現在の地形から推察される。

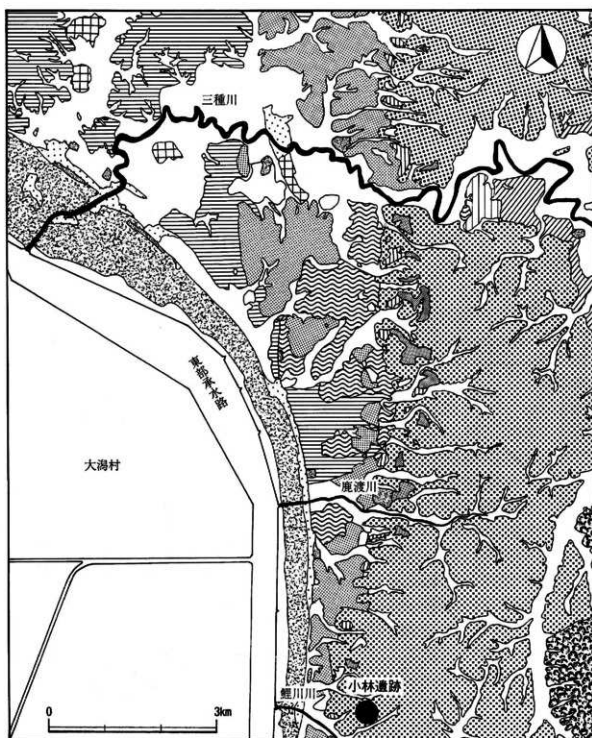
【参考文献】

秋田県『土地分類基本調査 五城目』1973(昭和48)年

秋田県『土地分類基本調査 森岳・羽後浜田』1984(昭和59)年

秋田県教育委員会『県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 一家の下遺跡(1)―』秋田県文化財調査報告書第256集 1995(平成7)年

秋田県教育委員会『洲崎遺跡―県営ほ場整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』秋田県文化財調査報告書 303集 2000(平成12)年



第4図 小林遺跡周辺の地形

第2節 歴史的環境

琴丘町には、『秋田県遺跡地図（中央版）』によれば、縄文時代から中世まで数多くの遺跡が挙げられている。最近の当地域における大規模な場整備事業や道路建設事業に伴う遺跡調査により、旧石器時代から中世における遺跡の数が増加し、その調査結果から当地域における歴史の一端が見えてきている。

平成6年、長谷田地区のは場整備事業に伴い調査された家の下遺跡において、琴丘町では初めての旧石器時代が確認された。遺跡は、下末吉面に相当すると考えられる森岳段丘面に立地している。縦長剥片素材のナイフ形石器や、縦長剥片もしくは横長幅広剥片素材の台形様石器を主体とする石器群が出土し、県内でも珍しい環状ブロック群が検出されている。平成11年、日本海沿岸東北自動車道建設事業に伴う堂の下遺跡の調査では、縦長剥片素材のナイフ形石器が出土している。両遺跡とも、東山系ナイフ形石器文化に属するもので、始良丹沢火山灰降灰（約25,000年前）以前の時期に相当する。

縄文時代では、前期の狐森遺跡がある。平成10年度にはは場整備事業に伴う調査が行われ、また、平成10・11年度の2カ年にわたって日本海沿岸東北自動車道建設事業に伴う調査が、平成12年度には一般国道7号琴丘能代道路建設事業に伴う調査が行われている。は場整備事業に伴う調査では、縄文前期の円筒下層式土器が出土している。さらに、日本海沿岸東北自動車道建設事業に伴う調査では、円筒下層a式、同b式の土器を主体とする捨て場が検出されている。兵ヶ沢遺跡の調査では、前期中葉の堅穴住居跡が検出された。中期後半では、盤若台遺跡で堅穴住居跡や石器廃棄遺構が検出されている。後期前半では、家の下遺跡で多数のフラスコ状土坑が調査されている。堂の下遺跡では、後期中頃の堅穴住居跡から細密な文様を施した石棒が見つかった。晩期には高石野遺跡がある。遺跡は、小林遺跡から北西約1km、標高20m前後の台地上にあり、昭和57年の琴丘町教育委員会の調査では、堅穴住居跡等は検出されなかったものの、後期後半から晩期中頃までの土器群が多数出土している。とくに晩期前半の大洞B、同BC式に伴う土製品が多く、中でも3点出土した海獣を模したと思われる土笛は町のシンボルにもなっている。

古代の遺跡では泉沢中台遺跡がある。平成6・7年にはは場整備事業に伴い発掘調査されたもので、10世紀の掘立柱建物跡、板塀跡などと共に製鉄関連遺構が4基検出されている。盤若台遺跡の調査では、平安時代の掘立柱建物跡や堅穴住居跡、製鉄炉などが確認された。隣接する金仏遺跡の調査でも同様に、製鉄関連の集落跡が見つかった。また、北牛淵遺跡や諏訪長根遺跡では土師器や須恵器が見つかったが、発掘調査がなされていないため、詳細は不明である。

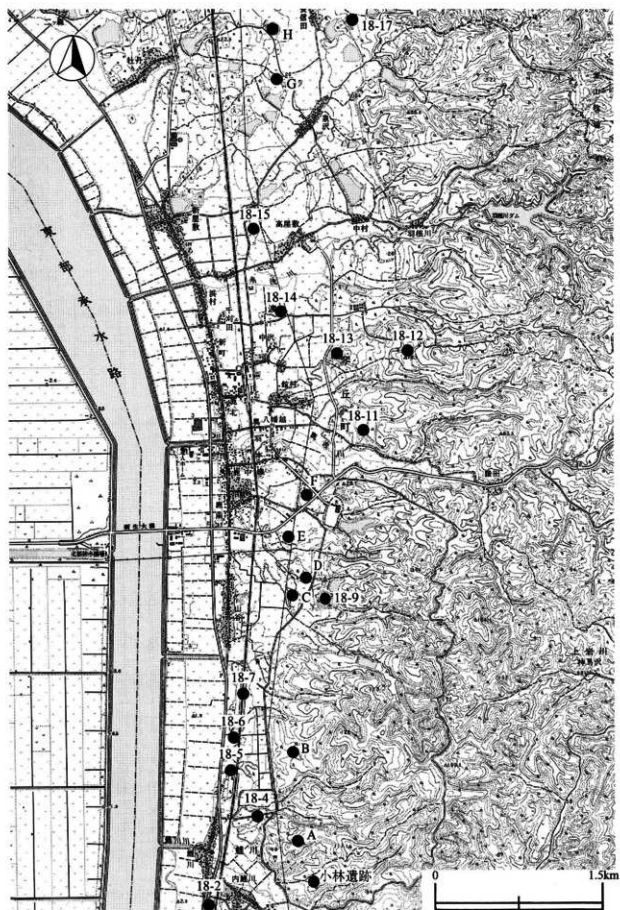
中世の遺跡では、平成10年度から3カ年計画で調査が行われた堂の下遺跡がある。小林遺跡とは谷を隔てた北側の丘陵にあり、遺跡の広がりには70,000㎡以上に及ぶ。平成10・11年度の調査では、13世紀の製鉄関連遺構や多数の鋳型が見つかり、製鉄から鋳造まで行っていた大規模な生産遺跡であったことが解明されている。このほか、中世城館として館の越館・古館城跡・中野館・信雄城跡などがあり、前2遺跡では空堀が確認されている。しかし、城館に関する詳細な古記録類は皆無であり、また発掘調査が行われていないため詳しいことは不明である。『琴丘町史』には、「琴丘の地は安東氏の支配地であったことは間違いなく、言い伝えによると古館の領主柄杓人は、湊安東氏の臣下であったようで、十六世紀の天文年間に松山安東愛季と湊安東友季の間におこった湊合戦で、松山安東氏に

滅ばされたという。琴丘町の現代にまでつながる地域の姿は、中世すなわち城館の時代にその礎がつけられたといつてよい」と記されている。

以上のように、琴丘町では旧石器時代から現代に至るまで、連続と人々の営みを認めることができる。

【参考文献】

- 秋田県教育委員会 【秋田県遺跡地図(中央版)】 1990(昭和59)年
- 秋田県教育委員会 【遺跡詳細分布調査報告書】 秋田県文化財調査報告書第267集 1996(平成8)年
- 秋田県教育委員会 【県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-一家の下遺跡(1)-】 秋田県文化財調査報告書第256集 1995(平成7)年
- 秋田県教育委員会 【県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-一家の下遺跡(2)-】 秋田県文化財調査報告書第256集 1998(平成10)年
- 秋田県教育委員会 【県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ-泉沢中台遺跡-】 秋田県文化財調査報告書第276集 1998(平成10)年
- 秋田県教育委員会 【日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-兵ヶ沢遺跡-】 秋田県文化財調査報告書第296集 2000(平成12)年
- 秋田県教育委員会 【一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る発掘調査報告書Ⅲ-盤若台遺跡-】 秋田県文化財調査報告書第319集 2001(平成13)年
- 秋田県教育委員会 【主要地方道琴丘上小阿仁線高速交通関連整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-盤若台遺跡-】 秋田県文化財調査報告書第331集 2001(平成13)年
- 秋田県教育委員会 【一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ-金仏遺跡-】 秋田県文化財調査報告書第333集 2002(平成14)年
- 琴丘町史編さん委員会 【琴丘町史】 1990(平成2)年



第5図 小林遺跡周辺の遺跡分布

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	現状	土地所有者	主な遺構・遺物
18-2	中野館	琴丘町鯉川字中野1-1	館跡	畑地・山林	民有	空堀、段築
18-4	真山野	琴丘町鯉川字真山野7-3	遺物包含地	水田	民有	縄文土器片
18-5	陣場野	琴丘町鯉川字陣場野33	遺物包含地	畑地	民有	縄文土器片
18-6	鯉川高石野	琴丘町鯉川字高石野	遺物包含地	山林	公有	
18-7	高石野	琴丘町直渡字高石野114	遺物包含地	畑地・山林	民有	土壘、縄文土器(中期、後期、晩期)、土製品(土偶、土面、耳栓、土甕)、石器(石鏃等)、石製品(石刀、石棒、岩版等)
18-9	館の越館	琴丘町直渡字狐森20外	館跡	原野	民有	空堀
18-11	北牛洞	琴丘町直渡字北牛洞27-1	遺物包含地	原野	民有	縄文土器片
18-12	古館城跡	琴丘町直渡字諏訪長根65	館跡	山林	民有	空堀、段築、井戸
18-13	諏訪長根	琴丘町直渡字諏訪長根79	遺物包含地	畑地・山林	民有	縄文土器片、須恵器片、石器
18-14	鬼沢口	琴丘町直渡字鬼沢口184	遺物包含地	畑地	民有	縄文土器片、石器
18-15	宝電前	琴丘町直渡字宝電前36	遺物包含地	水田・畑地	民有	住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器片(晩期)、石器
18-17	長信田	琴丘町直渡字長信田家後54-5	遺物包含地	畑地・牧草地	民有	石器
A	堂の下	琴丘町鯉川字堂の下72	集落・生産跡			竪穴住居跡、製鉄炉、炭窯、ナイフ形石器、縄文土器片、石器、弥生土器片、銅器、鉄滓
B	中陣場	琴丘町鯉川字中陣場	遺物包含地	山林		鉄滓
C	兵ヶ沢	琴丘町直渡字兵ヶ沢48	集落・生産跡		民有	竪穴住居跡、縄文土器片、石器、土師器片
D	狐森	琴丘町直渡字狐森29-1	集落、捨て場		民有	捨て場、フラスコ状土坑、縄文土器片、石器、土師器片
E	金仏	琴丘町直渡字金仏31	集落			竪立柱建物跡、鍛冶炉、縄文土器片、石器、土師器片
F	盤若台	琴丘町直渡字盤若台121	集落			竪穴住居跡、製鉄炉、縄文土器片、石器、土師器片、鉄滓、陶磁器片
G	泉沢中台	琴丘町直渡字泉沢中台71	集落			竪立柱建物跡、製鉄炉、縄文土器片、石器、土師器片、陶磁器片
H	家の下	琴丘町直渡字長信田家の下1-5	集落			環状ブロック群、フラスコ状土坑、ナイフ形石器、縄文土器片、石器

第1表 小林遺跡周辺の遺跡一覧

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概要

小林遺跡は既述のように、鯉川川に浸食された丘陵地上に位置する。調査範囲の北縁・南縁は沢により隔てられている。また、調査範囲内の北側には北西から南東方向に沢が入り込んでいる。この沢より南側の平坦面に平安時代を中心とする遺構・遺物が多数検出された。平坦面は調査範囲のさらに東西にのびていることから、遺跡範囲はより東西に広がると考えられる。

今回報告する縄文時代の遺構・遺物は、おもに平坦面から南側の低い尾根状地形の周辺で検出された。検出遺構は竪穴住居跡1軒、陥し穴状土坑2基、フラスコ状土坑2基である。

第2節 基本土層

遺跡の基本土層は、調査区を縦貫する計画路線のセンター杭を結ぶラインで以下の通り観察された。

第Ⅰ層 暗褐色土(10YR3/3)。調査区の全体を覆う現地表土。縄文時代・古代の遺物を若干包含する。層厚10～50cm。

第Ⅱ層 黒褐色土(7.5YR3/2)。調査区において断続的な堆積を示す。調査区中央の平坦部付近にはみられない。縄文時代・古代の遺物を若干包含する。層厚5～20cm。

第Ⅲ層 暗褐色土(10YR3/4)。風化・砂質化した小礫や白色粒子を微量含む。縄文土器・石器・土師器・鉄滓をとくに調査区中央部付近において非常に多く包含する。層厚10～30cm。

第Ⅳ層 明褐色土(7.5YR5/6)。漸移層。調査区の南北尾根上では堆積が認められない。縄文時代・古代の遺物を若干包含する。層厚10～20cm。

第Ⅴ層 橙色土(7.5YR6/6)。地山層。調査区中央の平坦部以南では粘性・しまりともに強い粘質土であるが、調査区北側の谷落ち際より以北では砂質土に漸移的に変化する。砂質土中には砂鉄が含まれている。

調査区中央の平坦面は当初、人為的に造成されたものかとも予測されたが、土層観察の結果、自然の地形であることが判明した。第7図にみるように南北の谷落ち際までの堆積は層厚が一定で、水平な堆積を示している。なお、十和田aなどの火山灰は確認されなかった。

北側の谷部では第8図に示す土層が観察された。黄褐色土と暗褐色土の互層状堆積は、数度にわたる土砂崩れが過去にあったことを示している。

第3節 調査の方法

1 調査区の設定

計画路線の基準杭STA.NO176+00中心杭を原点(MA50)とし、この原点から真北方向に基準点を選定し、この基準点に直交する4m×4mのグリッドを設定した。グリッド杭には東から西に向

かって東西方向を示す・・・LS・LT・MA・MB・・・というアルファベットと、南から北に向かって南北方向を示す・・・48・49・50・51・・・の2桁の数字を組み合わせた記号を記入し、各グリッド杭に両者を組み合わせ、グリッド呼称は南東隅の記号（MA50など）を用いた。

調査対象全域にグリッドを設定することにより、計画的な調査と同時に遺構の平面的位置の把握に努めた。

2 発掘方法及び記録作成

調査は範囲確認調査の結果に基づき、表土除去は重機を用いて行い、その後にグリッド杭打設を行った。遺構の確認はⅣ～Ⅴ層上面を中心とし、一部Ⅲ層上面で行った。遺物は、層位毎に取り上げを行った。

＜遺構の記録＞検出された遺構は、図面と写真により記録を行った。図面に用いた縮尺は1/20を基本とし、遺物の微細図は1/10とした。まず、半裁により遺構内部に堆積した覆土の土層を観察・記録し、平面実測図を作成するという手順をとった。遺構番号は、確認毎に1から通し番号を付した。

＜遺物の取り上げ＞遺物は、遺跡名・出土グリッドもしくは遺構名・遺物番号・出土年月日を記入した袋に入れ、取り上げた。遺構外の場合は層位毎にグリッド一括で取り上げ、遺構内のものは遺構内一括もしくは遺物番号を付して分布図・微細図を作成し、取り上げた。

＜写真の撮影＞記録のため撮影した写真は、35mm判モノクロ・リバーサルをそれぞれ使い分けながら撮影した。

3 遺物整理の方法

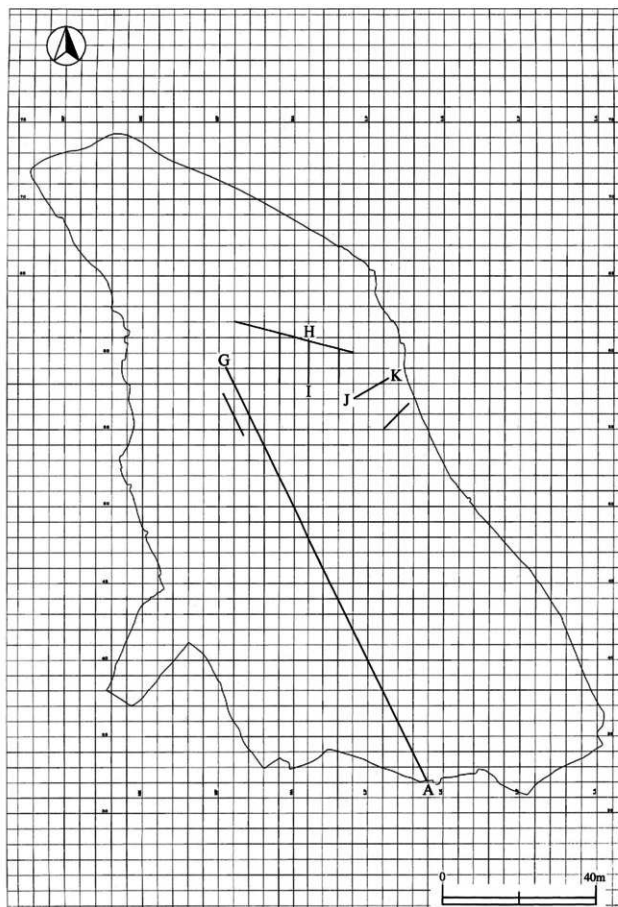
＜遺構の整理＞現場で作図した平面図・断面図により第2原因図を作成し、これをトレースした。

＜遺物の整理＞縄文時代に帰属する遺物では土器と石器が出土した。これらの遺物を洗浄し、接合作業を行った。また、遺物には遺構名・グリッド名・層位・出土年月日を註記した。

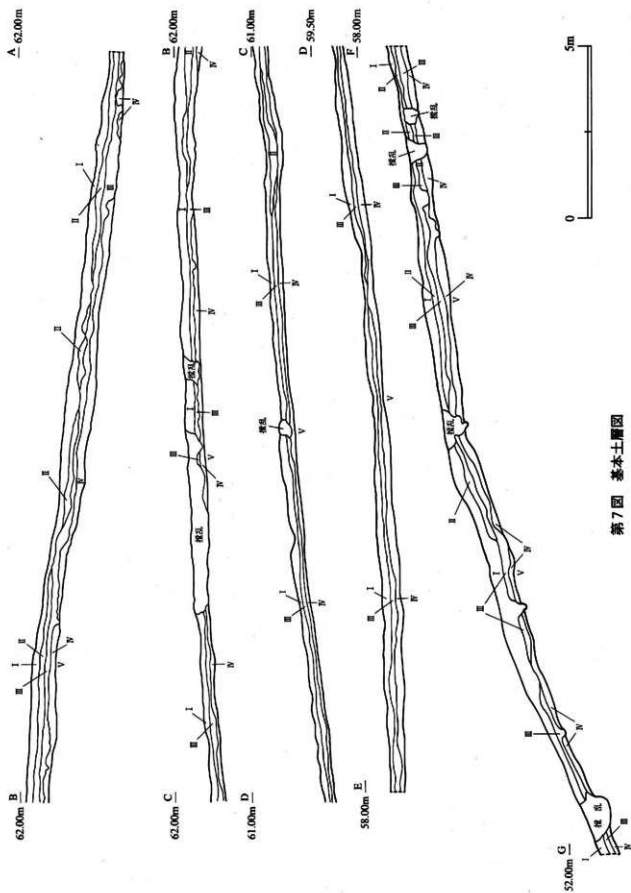
＜石器の個別別資料分類＞石器はすべて個別別資料分類を行った。分類基準は、接合例を参考にしながら、色調・石質に基づいた。単独個体を除いて、遺構内外で合計33個体に分類可能であった。

＜土器・石器の実測図作成＞ある程度復元された土器は図を作成し、土器破片については拓影を採った。石器は1/1で図化した。

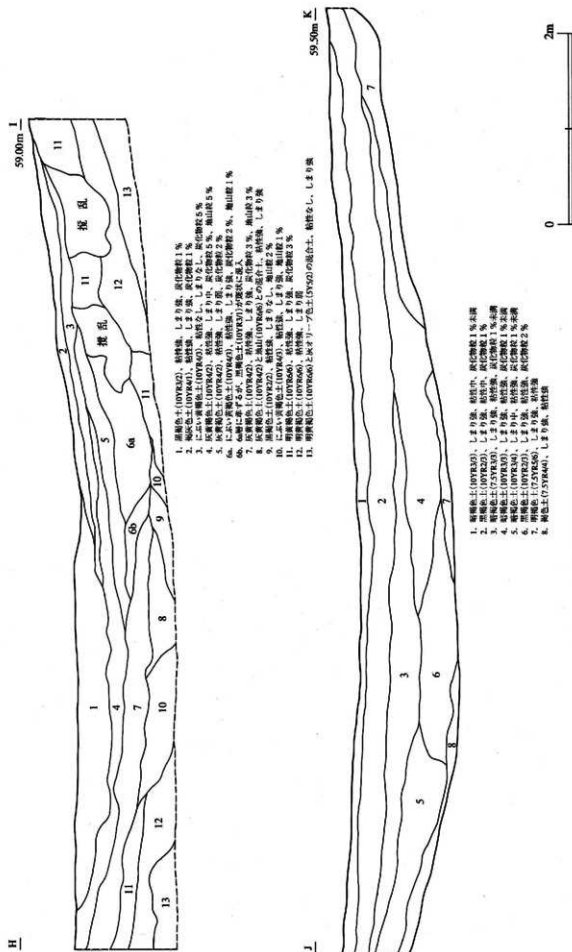
＜遺物の写真撮影＞大判カメラ（4×5）によりモノクロ撮影を行った。



第6図 トレンチ位置図



第7図 基本土層図



第8図 北側谷部土層断面図

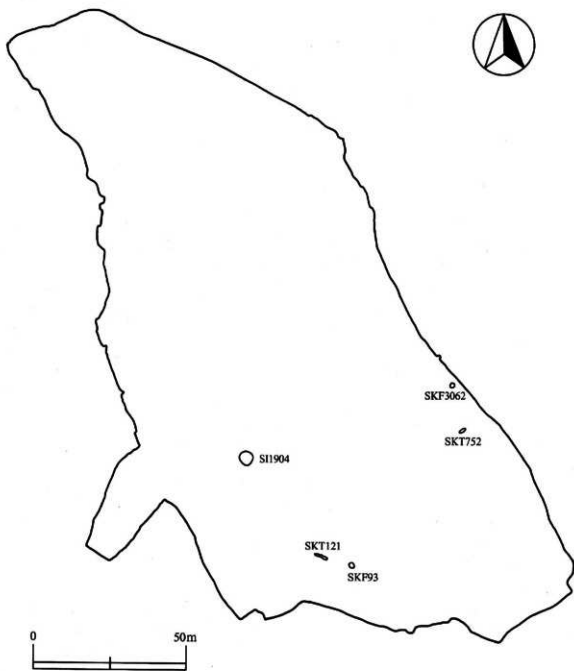
* 発掘調査の経過

平成12年	調査状況	特記事項
4月24～28日	調査前風景の写真撮影。重機による表土除去。調査区南側から土坑・焼土遺構・柱穴様ピットの検出、調査。	水準測量業者・コンテナハウス等のリース業者に対する現地説明を行う。
5月1～12日	重機による表土除去。遺構の検出・調査。大井総合技術によるグリッド枕打設。	五城目町・八郎海町作業員に対する説明会。コンテナハウスの設置。
5月15～19日	発掘器材の搬入。重機による表土除去。遺構の検出・調査。調査区南東隅で堅穴住居跡を1軒検出。	作業員を入れて本格的な調査を始める。
5月22～26日	遺構の検出・調査。調査区北西側の谷部から尾根部にかけ調査。	ベルトコンベアー等リース品の搬入。
5月29～6月2日	調査区南側の基本土層図作成。	
6月5～9日	調査区南側斜面で大形の柱穴列を検出。縄文時代の陥し穴状土坑・フラスコ状土坑を検出。	
6月12～16日	調査区南側の調査。	
6月19～23日	調査区南側の調査。旧石器時代の試掘坑を設定し、調査。	
6月26～30日	調査区南側・中央部の調査。グリッド37ライン以南の空撮を行い、公団に引き渡す。	
7月3～7日	調査区南側・中央部の調査。南側尾根上で堅穴住居跡を1軒検出。調査区中央部で焼土遺構をまとめて検出。	
7月10～14日	調査区南側の尾根上で縄文時代の堅穴住居跡1軒、古代の製鉄炉1基を検出。	秋田県埋蔵文化財センター中央調査課の臨時職員が見学のため来跡。
7月17～21日	調査区中央部東側で製鉄炉1基検出。	穴澤義功氏、調査指導のため来跡。
7月24～28日	調査区南側・中央部の調査。	
7月31～8月4日	グリッド37～40ラインの空撮を行い、公団に引き渡す。	調査に並行して鍛冶炉サンプル洗浄を開始する。
8月7～11日	調査区南側で粘土探掘坑と思われる土坑を検出。調査区中央部の焼土遺構より刻文の施された土師器が出土。	釜休み前の安全対策・環境整備を行う。
8月14～18日	釜休み	
8月21～25日	調査区中央部の焼土遺構から土製勾玉が出土。同中央部で堅穴住居跡3軒検出。	
8月28～9月1日	調査区北側の調査に着手。調査区北側の尾根西斜面で中世の地下式炭竈4基検出。グリッド40～45ラインの空撮を行い、一部公団に引き渡す。	穴澤義功氏、調査指導のため来跡。
9月4～8日	調査区中央部西側で粘土探掘坑の可能性がある土坑を2基検出。	
9月11～14日	調査区北・南・中央部の調査。	
9月18～22日	調査区北・南・中央部の調査。	
9月25～29日	調査区南側の調査終了。	穴澤義功氏、調査指導のため来跡。
9月30日		現地説明会。
10月2～6日	旧石器時代の試掘坑を設定し、調査。	
10月10～13日	グリッド45～48ラインの空撮を行い、48ライン以南を公団に引き渡す。	
10月16～20日	八郎海東部承水路から遺跡遠景写真撮影。	
10月23～27日	調査区北側・中央部の調査終了。グリッド48ライン以北の空撮。	
10月30～11月2日	調査区北側谷部の調査終了。公団立ち会いのもと現場を引き渡す。現場の撤収。	

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構と出土遺物

縄文時代に帰属する遺構は、竪穴住居跡1軒、陥し穴状土坑2基、フラスコ状土坑2基の計5基であり、すべて調査区南半での検出である。



第9図 遺構配置図（縄文時代）

(1) 竪穴住居跡

1 S11904 (第10図、図版2・3)

<確認層> IV層上面

<検出位置・検出状況> MB43グリッドにおいて平面プランを検出。

<切り合い関係> なし。

<規模・形態> 炉の中心を通る軸(N-S)が3.68m、それに直交する軸(E-W)が3.50mの略円形を呈する。

<床面・柱穴> 床はほぼ平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。柱穴は6基検出された。径0.21~0.42mで、深さは0.05~0.13mと浅い。

<付属施設> 南側の壁面に接して、埋設土器を伴った複式炉が住居中軸線上に検出された。長軸1.33m×短軸0.86mで、土器埋設部の深さは床面から0.27mである。土器埋設部から南側に連続して土坑状の浅い掘り込みがあり、さらに壁面に接して溝状の掘り込みが見られた。土坑状の掘り込みは被熱により床面が赤変しており、住居床面に比べて硬質化している。また、石囲いに用いられたと考えられる珪質頁岩の礫が2点出土した。

南西隅の壁際には石器集中部が検出された。床面に石器が折り重なった状態で出土したが、掘り込みは検出されなかった。

<覆土の状況> 17層に分けられた。1~14層は自然堆積土。13層は壁の崩落土。14層は炭化物が多く混入し、炉の使用時に堆積したものと考えられる。15~17層は地山質でやや焼成をうけて赤変しており、土器埋設炉構築時に貼られたものと判断される。

<出土遺物> 遺物分布は住居南半に偏った傾向を示す。土器は覆土中・床面直上・複式炉から3個体が出土した(第11図1~3、図版5上段)。1は、炉に埋設された粗製の深鉢形土器である。口縁部・胴部下半~底部は出土しなかった。LR原体を横位に回転して施文している。外面には斑状に煤が付着。内面には横位方向にミガキが観察される。焼成は普通。胎土に長石などを微量含む。剥落が顕著。

2は炉の西側から出土した精製の深鉢形土器である。出土状況は横位で押しつぶされたような状態であった。文様は、刺突文により頸部と胴部が区画されている。頸部は無文で横方向のミガキが観察され、煤が多く付着する。胴部は横位回転のLR縄文を施したのち、縦方向の沈線が描かれ、その上端に「刺突文+円形の沈線」が施されている。その区画ごとに波状にほぼ平行する2条の沈線が規則的に施されている。器形はキャリバー状を呈する。焼成は良好。

3は炉の東側から出土した粗製の深鉢形土器である。出土状況は2同様、床面直上に横位で出土した。胴部にやや膨らみをもち、口縁はほぼ垂直に立ち上がる。施文はLR縄文を横位に回転して施している。内面はみがかれている。また、器面内外ともに煤が多く付着しており、剥落が顕著である。焼成は普通。

石器は、覆土中と石器集中部から、削器1点・撚器2点・二次加工ある剥片4点・残核3点・剥片40点・碎片3点の計53点が出土した。すべて珪質頁岩製であり、個別別資料No. A~Dに分類される。個別別資料No. A (第12~16図1~17・A-1-1~A-8-4、図版5下段)；石器集中部からままとまって出土した。

削器(1)は縦長剥片を素材とし、右側縁に表裏から平坦剥離が施され刃部が作出されている。素材の打面は残置する。

掻器(A-2-1)は縦長剥片を素材としているが、左側面に縦長剥片を連続的に剥離した石核の作業面と打面が残っていることから、打面再生剥片を素材としていることが分かる。素材剥片の打面部に石器表面から急斜度の調整加工が施され、やや弧状を呈する刃部が作出されている。右側縁には微細な剥離痕が観察される。打面は一部残置する。

A-1-4・A-4-2・2・3は二次加工ある剥片である。A-1-4は縦長剥片を素材とし、右側縁に連続的な調整加工が施されている。打面残置。A-4-2は、寸づまりの縦長剥片を素材とし、右側縁下半部に調整加工が施されている。打面残置。2は剥片素材石核の転用である。石器表面より右側縁に直線的な調整加工が施され、刃部は「く」の字状を呈する。素材の打面は石核時に除去されているが、主要剥離面は残されている。3は剥片を素材とし、周囲から押圧剥離により、全体の形状が三角形を呈するように整えられている。このことから石鏃未製品の可能性もあるが、ここでは二次加工ある剥片とした。右側縁には階段状剥離が目立つ。

本個体では合計8例の接合例が得られた。

接合例A-1は二次加工ある剥片1点・剥片4点が接合する。同一の単剥離面打面からA-1→2→3が剥離された後、打面を90度転位して、同一の複剥離面打面からA-4→5が剥離されている。

接合例A-2は掻器1点・剥片1点が接合する。複剥離面打面からA-2-1が剥離されている。その後、90度打面転位を行い、A-2-1の打面側にみられる剥離が最低2回なされ、再度90度打面転位により、同じく背面にみられる打面調整がなされた後、A-2-2が剥離されている。

接合例A-3は剥片2点の接合である。同一方向からの剥離によりA-3-1→2が剥離されている。

接合例A-4は二次加工ある剥片1点・剥片4点が接合する。A-4-1・2を含む数枚の剥片が同一方向から剥離された後、180度打面転位によりA-4-3→4→5が剥離されている。

接合例A-5は剥片2点の接合である。A-5-1が剥離された後、90度打面転位によりA-5-2が剥離されている。打面は2点とも単剥離面打面である。

接合例A-6は剥片3点の接合である。3点とも同一の単剥離面打面から連続的に剥離されている。

接合例A-7は剥片5点の接合である。A-7-1・2が剥離された後、90度打面転位により同一の複剥離面打面からA-7-3→4→5というように縦長剥片が連続的に剥離されている。

接合例A-8は剥片4点の接合例である。すべて同一の単剥離面打面から縦長剥片が連続的に剥離されている。

4・5は剥片素材の残核である。4は横長幅広剥片を素材とし、表裏の打面と作業面を交互に入れ替えて、小形の横長幅広剥片を剥離している。5は横長幅広剥片を素材とし、素材表面に打面、裏面に作業面を設定して小形の横長幅広剥片を剥離している。

その他の剥片には、背面構成の観察から、同一方向から連続的に剥離されている剥片(6~10)、180度打面転位の認められる剥片(11・12)、90度打面転位の認められる剥片(13~17)がある。接合しないこれらの剥片は、形態的に横長幅広剥片に偏る傾向がある。

個体別資料No. B (第16図18)：石器集中部および床面直上から出土。残核1点・剥片3点・碎片3

点の計7点で構成される。節理が非常に発達した個体である。18は分割礫を素材とした残核である。分割面を打面とし、石核調整を介せず、不定形な横長幅広剥片が1枚剥離されている。底面には台石痕と考えられる潰れ痕が認められる。図示しなかったが剥片はすべて不定形な剥片である。

個体別資料No. C (第16図19) : 石器集中部から出土した単独個体の撚器である。単剥離面打面の縦長剥片を素材とし、素材末端部に急斜度な調整加工を施し、直線状の刃部を作出している。素材は、背面構成の観察から、単設打面から連続的に剥離された縦長剥片であることがうかがえる。打面残置。

個体別資料No. D (第16図20) : 石器集中部から出土した単独個体の二次加工ある剥片である。単剥離面打面の縦長剥片を素材とし、その両側縁に微細な剥離痕が連続的に観察される。とくに右側縁はやや鋸歯状を呈している。打面残置。末端部は欠損。

<時期> 出土した土器から縄文時代中期後葉(大木10式)と判断した。また、採取した炭化材によるC14年代測定の結果、暦年代は紀元前2,695~2,620年の値を得た。

(2) 陥し穴状土坑

1 SKT121 (第17図、図版4上段)

<確認層> V層

<検出位置・検出状況> LQ37グリッドにおいて、等高線に平行して平面プランを検出。

<切り合い関係> 古代のSKP127に切られている。

<規模・形態> 長軸(E-W) 3.70m、短軸(N-S) 0.48m、確認面からの深さ0.77mの溝状を呈し、東側でやや広く開口する。底面は平坦で北壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁はやや傾斜をもつ。

<付属施設> 長軸方向に断ち割りをしたが、底面に逆茂木のピットは検出されなかった。

<覆土の状況> 3層に分けられた。1層は自然堆積、2層は壁面の崩落土、3層は地山ブロックが多く混入することから人為的堆積と考えられる。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないため不明。

2 SKT752 (第17図)

<確認層> V層

<検出位置・検出状況> LA37グリッドにおいて平面プランを検出。

<切り合い関係> なし。

<規模・形態> 長軸(E-W) 1.62m、短軸(N-S) 0.40m、確認面からの深さ0.51mの溝状を呈する。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、西側壁面は曲線を描きながら凸状に立ち上がっている。

<付属施設> 検出されなかった。

<覆土の状況> 3層に分けられた。自然堆積である。

<出土遺物> なし。

<時期> 出土遺物がないため不明。

(3) フラスコ状土坑

1 SK F93 (第17図、図版4下段)

＜確認層＞ V層

＜検出位置・検出状況＞ LO36グリッドにおいて平面プランを検出。

＜切り合い関係＞ なし。

＜規模・形態＞ 開口部は長軸(NW-SE)1.78m、短軸(NE-SW)1.51m、底面は径1.68～1.82mの略円形を呈する。確認面からの深さは遺構中央部で1.10mを測る。

＜付属施設＞ 東側の底面に径0.20mのピットが1基検出された。

＜覆土の状況＞ 13層に分けられた。1・2層は自然堆積。1層中には炭化物が多く混入していることから、本遺構に南接する古代の炭窯(SW94)に由来する覆土と考えられる。6・8・9・10層は壁の崩落土。3・4・5・7・11層は人為の堆積。12・13層は色調が暗く水分を多く含んでおり、1～11層とは明らかに異なっているが由来は不明。

＜出土遺物＞ なし。

＜時期＞ 出土遺物がないため不明であるが、琴丘町家の下遺跡で同形態のフラスコ状土坑が数多く検出されている。採取した炭化材によるC14年代測定の結果、暦年代は紀元前1,270～1,000年という値を得た。

2 SK F3062 (第17図)

＜確認層＞ V層

＜検出位置・検出状況＞ LH48グリッドにおいて平面プランを検出。

＜切り合い関係＞ なし。

＜規模・形態＞ 径1.31mの略円形を呈する。確認面からの深さは遺構中央部で1.05mを測る。底面の径は1.56mである。

＜付属施設＞ なし。

＜覆土の状況＞ 6層に分けられた。1・2層は自然堆積。3～6層は地山が多く混入し、壁の崩落土および人為の堆積と考えられる。

＜出土遺物＞ なし。

＜時期＞ 出土遺物がないため不明である。

第2節 遺構外出土遺物 (第18～33図)

調査区全体にわたってI～V層上面から総計256点の石器が出土した。ほとんどが珪質頁岩製である。石器組成は、石鏃3点・石槍1点・石匙3点・石筥2点・両面調整石器1点・削器14点・掻器3点・二次加工ある剥片28点・残核24点・剥片172点・砕片4点・有溝石製品1点である。これらは52の個別別資料(うち19は単独個体)に分類される。個別別資料は石器製作作業の最小単位であり、石器組成・剥片形状から、以下に示す類型化が可能である。

石器組成 A類：残核+剥片+製品

B類：残核+剥片

C類：剥片+製品

D類：剥片

E類：製品

剥片形状 1類：大形（最大長7cm以上）・横長幅広

2類：小形・横長幅広

3類：小形・横長幅広+縦長

この類型の組み合わせ（A-1類・B-2類・・・）により、個体別資料を把握していく。以下、個体別資料毎に内容を記載する。

個体別資料No. 1（1-13）

A-2類。二次加工ある剥片3点・残核4点・剥片10点の合計17点で構成される。

定型的な製品を伴わない。剥片は、横長幅広のもので占められ（3-5）、二次加工ある剥片（1・2）の素材に供給されている。残核は剥片素材のもの（6）と礫素材のもの（8・12・13）があるが、礫素材のものすべて分割礫を素材としている。

本個体では3例の接合例を得た（6・7・10）。これらをもとに剥片剥離過程を概観すると、①打面と作業面を交互に入れ替えて横長幅広剥片を剥離する過程（6）、②両設打面から横長幅広剥片を剥離する過程（7-9）、③90度打面転位により寸詰まりの縦長剥片～横長幅広剥片を剥離する過程（12）、④主に単設打面から寸詰まりの縦長剥片を連続的に剥離する過程（13）が認められる。

個体別資料No. 2（14-32）

A-2類。二次加工ある剥片1点・残核1点・剥片17点の合計19点で構成される。

定型的な製品を伴わない。二次加工ある剥片（22）は、横長幅広剥片を素材とし、右側縁下端に断続的な平坦剥離が施されている。残核（14）をみると、求心状の剥片剥離により横長幅広剥片が剥離されていることがうかがえる。その他の剥片も横長幅広剥片を中心としており、若干、寸詰まりの縦長剥片がみられる。

接合例は4例得られた（20・23・26・29）。すべて剥片同士の接合である。

個体別資料No. 3（33-52、図版6上段）

A-3類。石槍1点・石匙1点・削器3点・二次加工ある剥片5点・残核2点・剥片16点の合計28点で構成される。

石槍（33）は、両面に平坦剥離が施され、断面が凸レンズ状に仕上げられている。また、裏面中央付近には階段状剥離が認められる。裏面末端に素材剥片の主要剥離面が残されていることから、剥片素材であることがわかる。石匙（34）は、素材剥片の表面全体に平坦剥離が施され、つまみ部は表裏面からの平坦剥離により作出されている。素材剥片の打面は表面からの剥離により除去されている。裏面下半部には不連続な微細剥離痕が顕著に認められる。削器は3点認められる（35・36・38）。

（35）は、剥片の右側縁を表面からの、左側縁を表裏面からの連続的な平坦剥離により、刃部が作出されている。（36）は、石刃状剥片ともよぶ縦長剥片を素材とし、右側縁下半に連続的な平坦剥離が施された削器である。剥片は縦長剥片を中心に、横長幅広剥片も見られる。

個体別資料No. 4（53-56）

C-2類。削器1点・二次加工ある剥片1点・剥片3点の合計5点で構成される。削器（53）は、

横長幅広剥片を素材とし、左側縁に裏面から連続的な平坦剥離が施されている。また、右側縁には不連続な微細剥離痕が認められる。打面残置。剥片は、3～4cmほどの小形の縦長～横長幅広剥片で占められる。

個体別資料No. 5 (57～62)

A-2類。石鏃1点・石筥1点・削器1点・残核4点・剥片16点・砕片4点の計27点で構成される。石鏃(57)は先端部・基部ともに欠損しているが平基有茎であることがうかがえる。表面基部側と裏面に被熱痕が認められ、被熱により欠損していることがわかる。石筥(58)は先端部・基部ともに欠損しており、先端部の欠損は石鏃同様、被熱に起因する。削器(59)は、打面を残置した縦長剥片を素材とし、裏面から両側縁にやや鋸歯状の調整加工が連続的に施されている。残核(61・62)からは寸詰まりの縦長剥片～横長幅広剥片が剥離されている。(61)は単剥離面打面からの連続的剥離がうかがえる。裏面末端縁辺には台石痕とおもわれる小剥離が断続的に認められる。(62)は右側面を打面、上面を作業面として剥離されたのち、90度打面転位により作業面と打面を入れ替え、右側面を作業面として横長幅広剥片が剥離されている。最終的に同一打面から裏面と正面を作業面としての剥片剥離がなされている。

個体別資料No. 6 (63・64)

D-1類。剥片8点で構成される。打面は単剥離面打面と複剥離面打面の双方が認められ、背面は1点を除けば礫面を残すもので占められる。これらの剥片は、剥片剥離過程の初期段階で剥離されたものであろう。

個体別資料No. 7 (65・66)

C-1類。削器1点・二次加工ある剥片1点・剥片1点の計3点で構成される。削器(65)は縦長剥片を素材とし、打面を残置したまま、右側縁および素材末端部に裏面からの連続的な調整加工が施されている。

個体別資料No. 8 (67～70)

B-1類。残核1点・剥片7点の計8点で構成される。残核(67)は、剥片素材で、打面と作業面を交互に入れ替えて横長幅広剥片を剥離するものである。正面右側縁には被熱がみられる。剥片は、大形のものは背面の一部に礫面を残し、小形のものは残さないことから、それぞれは剥片剥離過程の前半段階と後半段階に生産されたものであることがわかる。すべて単剥離面打面である。このうち大形剥片(70)は右側面の礫面を打面、背面を作業面とした残核である可能性もあり、剥片剥離の過程で半分に折れたとも考えられる。

個体別資料No. 9 (71)

B-2類。残核1点・剥片5点の計6点で構成される。残核(71)は、礫面を打面として横長幅広剥片が剥離されている。右側面および裏面は自然の営為による割れ面である。剥片はすべて小形で礫面を残す比率が高いことから、原石は小形であったとおもわれる。

個体別資料No. 10 (72)

D-3類。剥片2点で構成される。2点とも背面に一部礫面を残す。

個体別資料No. 11 (73)

B-3類。残核1点・剥片1点の計2点で構成される。残核(73)は大形剥片を素材とし、その小

口面両端を打面とし、寸詰まりの縦長剥片～縦長剥片を剥離している。底面および右側面は折れ面である。残核から観察される剥片剥離過程は、まず、底面の折れ面を打面として縦長剥片が剥離されたのち、同一作業面で裏面からの剥離により、小形の横長幅広剥片が剥離されている。その後、上面の風化面を打面として寸詰まりの縦長剥片が剥離されている。

個体別資料No.12

D-2類。剥片3点で構成される。3点とも礫面は認められない。

個体別資料No.13

D-2類。剥片2点で構成される。2点とも背面に一部礫面を残す。

個体別資料No.14 (74)

C-2類。石匙1点・剥片2点で構成される。石匙(74)は、全周にかけて表裏から平坦剥離が施されている。表裏面ともに素材面が残されており、剥片を素材としていることがうかがえる。剥片のうち1点は著しい被熱痕が認められる。

個体別資料No.15 (75・76)

E-2類。削器2点・両面調整石器1点で構成される。剥片はみられないが、製品から推定される素材剥片の形状により2類とした。削器のうち、(75)は横長幅広剥片を素材とし、両側縁に裏面から連続的な調整加工を施している。最終的な刃部形状は弧状を呈する。上端は調整加工後に折れている。また、下端縁辺には被熱痕がみられる。もう1点の削器は図示していないが、大形部厚な剥片素材の残核を転用したものである。両面調整石器(76)は、素材不明であるが、表裏面から全面にわたって平坦な調整加工が施され、断面形状は三角形を呈するように仕上げられている。また、正面には底面の折れ面を打面とした剥離痕が見られ、それに対応するように裏面上端には2条の剥離痕が認められる。この2条の剥離痕は前者の剥離による台石痕の可能性もあり、製品ではなく残核に分類されるかもしれない。

個体別資料No.16

D-1類。剥片4点で構成される。このうち、大形剥片は背面に礫面を大きく残す。

個体別資料No.17

E-2類。二次加工ある剥片1点・剥片2点の計3点で構成される。図示していないが二次加工ある剥片は折れ面を打面として剥離が施されており、残核の可能性もある。

個体別資料No.18 (77～80)

C-1類。石匙1点・二次加工ある剥片2点・剥片17点の計20点で構成される。石匙(77)は剥片を素材とし、刃部はおもに裏面からの連続的な調整加工により作出されている。裏面に見られる調整加工は不連続で、使用に伴うものとおもわれる。つまみ部は表裏面からの調整加工により整形されている。剥片には礫面を残すものと残さないものがあり、縦長剥片～横長幅広剥片がみられる。

個体別資料No.19 (81)

B-3類。残核2点・剥片1点の計3点で構成される。残核(81)からは、90度打面転位を頻繁に繰り返して、寸詰まりの縦長剥片～横長幅広剥片を剥離する過程が観察される。礫面の状態から拳大ほどの原石が推定される。剥片は礫面を残す縦長のものである。

個体別資料No.20 (82・83)

C-1類。削器2点・二次加工ある剥片2点・剥片7点の計11点で構成される。削器(82)は、部厚な剥片の表面に平坦な調整加工が施されている。剥片類は大型なものから小形なものまでであるが、礫面を残すのは大型な剥片に偏る傾向にある。

個体別資料No.21 (84~86)

B-2類。残核2点・剥片8点の計10点で構成される。残核のうち、(84)は上面の風化面を打面として最低6枚の寸詰まりの縦長剥片~横長幅広剥片が剥離されたことがうかがえる。右側面及び表面には被熱痕が観察される。(85)は横長幅広剥片を素材とした残核である。素材の主要剥離面を作業面、末端部を打面として、2回の剥離により横長幅広剥片が剥離されている。残核や剥片には礫面をわずかに残すものもみられるが、総じて礫面は認められず、剥片剥離の最終段階に近い過程と考えられる。

個体別資料No.22

C-2類。二次加工ある剥片1点・剥片2点の計3点で構成される。1点を除いて礫面はまったく観察されない。

個体別資料No.23 (87~89)

A-2類。二次加工ある剥片2点・残核1点・剥片2点の計5点で構成される。残核(87)は剥片を素材とし、その主要剥離面を作業面として小形の横長幅広剥片が剥離されている。二次加工ある剥片(88)は両側縁に断続的な調整加工が施されている。

個体別資料No.24

D-2類。剥片3点で構成される。礫面は1点を除いて認められる。

個体別資料No.25

D-2類。二次加工ある剥片1点・剥片2点の計3点で構成される。礫面は剥片1点を除いて認められる。

個体別資料No.26

C-2類。二次加工ある剥片1点・剥片6点の計7点で構成される。図示していないが二次加工ある剥片は、剥片素材の残核の可能性もある。

個体別資料No.27 (90)

C-2類。削器1点・剥片1点の計2点で構成される。削器(90)は素材剥片の右側縁表面に連続的な平坦剥離が施され、表面の右側縁下半部にも部分的な剥離が及んでいる。上半部欠損。

個体別資料No.28 (91)

C-2類。削器1点・剥片2点の計3点で構成される。削器(91)は素材剥片の右側縁表面に連続的にやや急斜度の平坦剥離が施され、ノッチ状の刃部が作出されている。表面の左側縁下端部にも部分的な剥離痕が認められる。打面残置。

個体別資料No.29

C-1類。二次加工ある剥片1点・剥片1点の計2点で構成される。二次加工ある剥片は部厚なものを素材とし、主要剥離面側に数枚の平坦剥離が施されている。

個体別資料No.30 (92~97)

A-1類。削器2点・二次加工ある剥片1点・残核1点・剥片9点の計13点で構成される。削器のうち、92は大形部厚な横長幅広剥片を素材とし、素材末端部にやや急斜度の調整加工が施されている。刃部は鋸歯状を呈する。打面残置。(93)は、右側縁は裏面から、左側縁は表面からの調整加工により刃部が作出されている。打面残置。

接合例は1例得られた(94~97)。(95・96)等の剥片が剥離された後、(95)の剥離面を打面として数回の剥離がなされている。その後、石核は割れもしくは分割されている。なお、(97)の右側面は分割面である。剥片にはすべて礫面が観察される。

個体別資料No.31 (98-99)

C-1類。撚器1点・二次加工ある剥片3点・剥片2点の計6点で構成される。撚器(98)は素材剥片の打面側に平坦剥離を施し、弧状の刃部を作出している。右側縁には微細な剥離痕が観察される。二次加工ある剥片(99)は両側縁に断続的な剥離が施されている。

個体別資料No.32 (100)

B-2類。残核1点・剥片1点の計2点で構成される。残核(100)は頻繁な90度打面転位により寸詰まりの縦長剥片~横長幅広剥片が剥離されている。

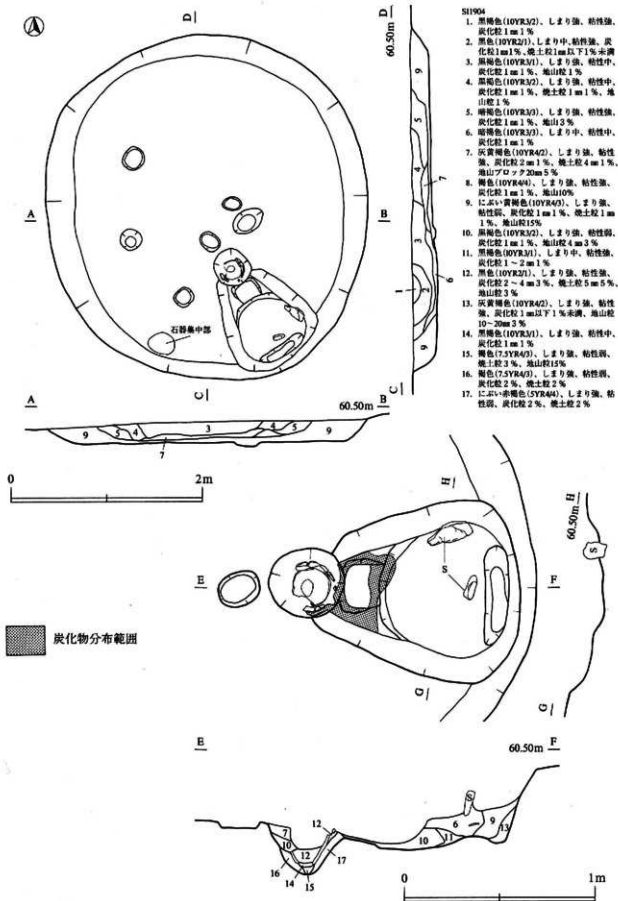
個体別資料No.33 (101・102)

C-2類。二次加工ある剥片1点・剥片1点の計2点で構成される。本遺跡唯一の玄武岩の個体である。礫面は2点ともみられない。

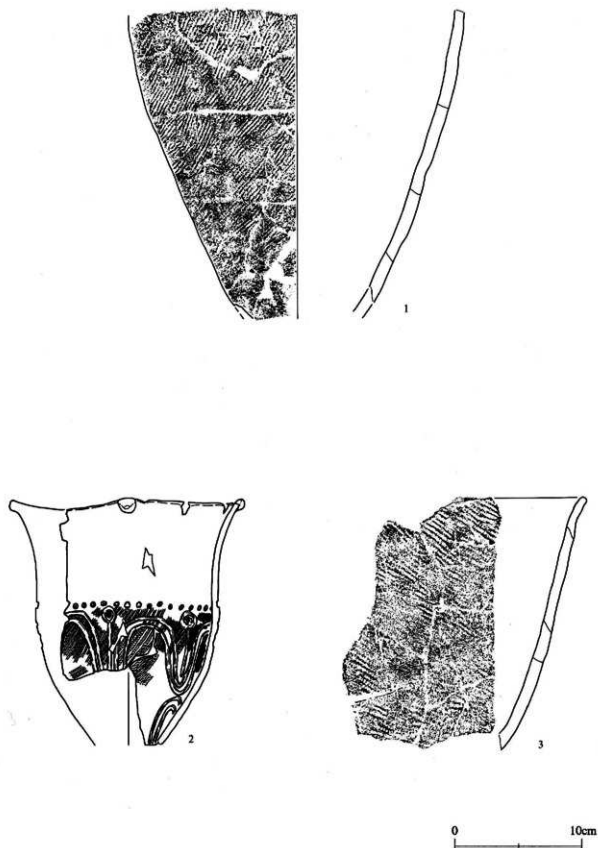
単独個体 (103~111、図版6下段)

石鏃(103・104)は2点とも凹基無茎で、先端部は欠損している。(103)は基部に被熱痕がみられる。石筈(105)は剥片を素材とし、裏面からの平坦な剥離により刃部が作出され、平面形状は長方形を呈する。右側縁には表面からの調整加工もみられる。上半部欠損。撚器のうち(106)は縦長剥片を素材とし、素材末端に急斜度の加工が施され、弧状を呈する刃部が作出されている。打面残置。

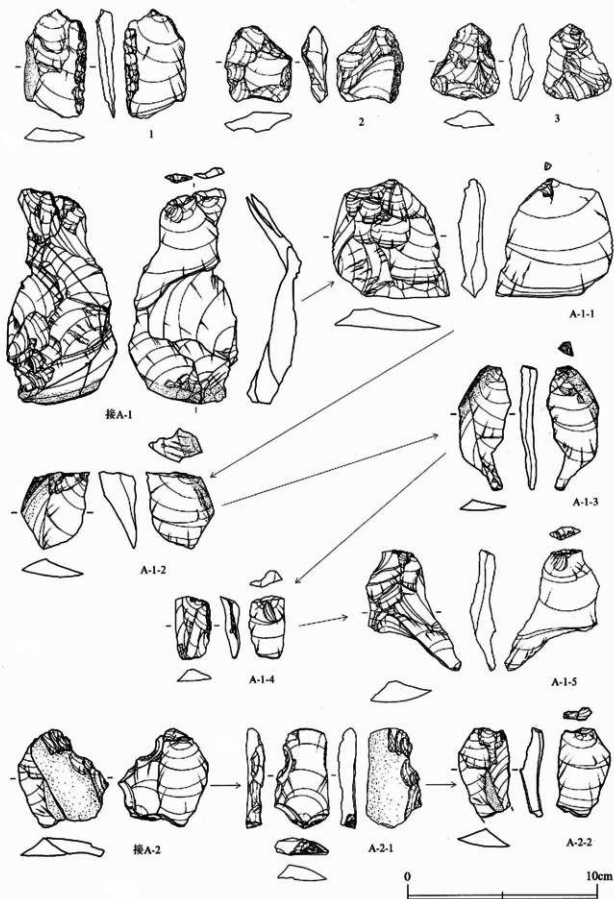
(107)は(106)同様、縦長剥片を素材とし、末端部に弧状の刃部が作出されている。また、両側縁にも裏面からの連続的な剥離が施されている。打面残置。残核には求心状剥離によるもの(108)や、板状礫を素材として小口面を作業面に設定しているもの(109)、小形で部厚な剥片を素材として数枚の剥片が剥離されているものなどがある。どれも横長幅広剥片が剥離されている。有溝石製品(111)は溝により先端部と体部が区別される。表面~側面には敲打痕がみられ、ハンマーとして用いられた可能性もある。下半部欠損。



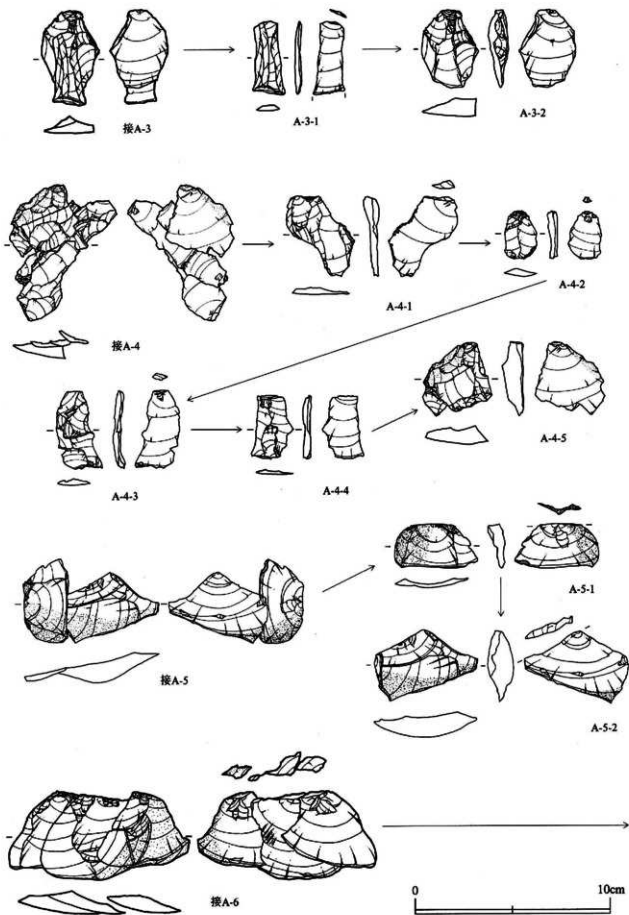
第10図 検出遺構(1) (SI1904)



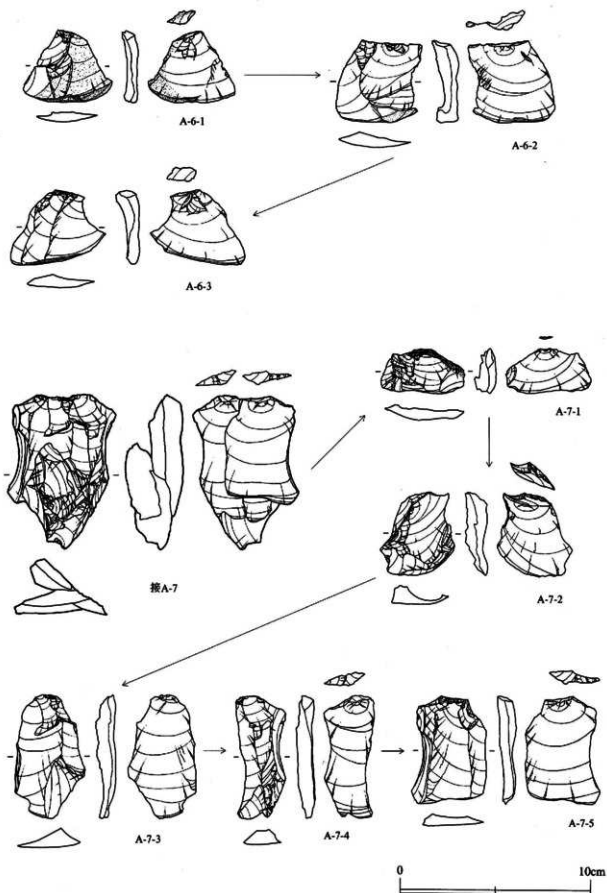
第11図 S11904出土土器



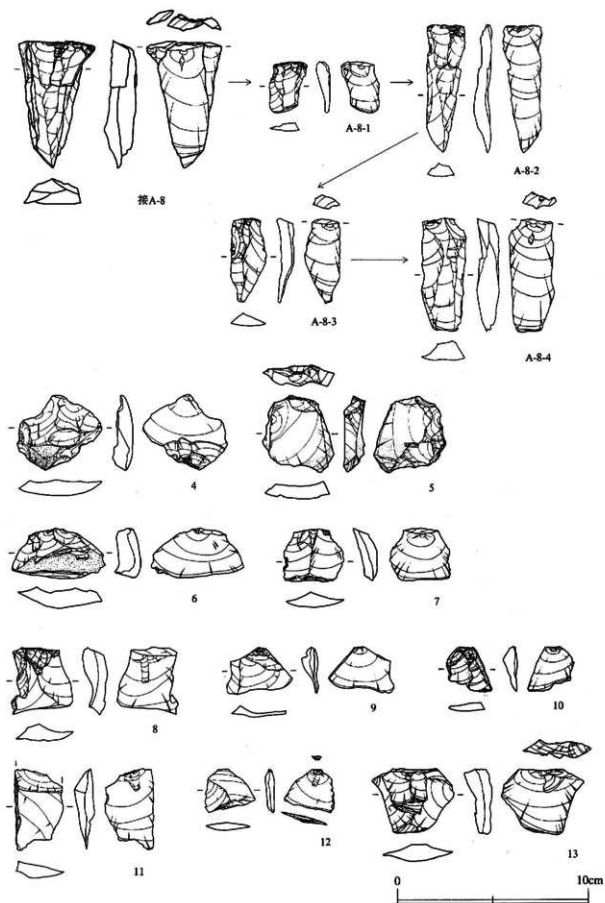
第12図 SI 1904出土石器 (1)



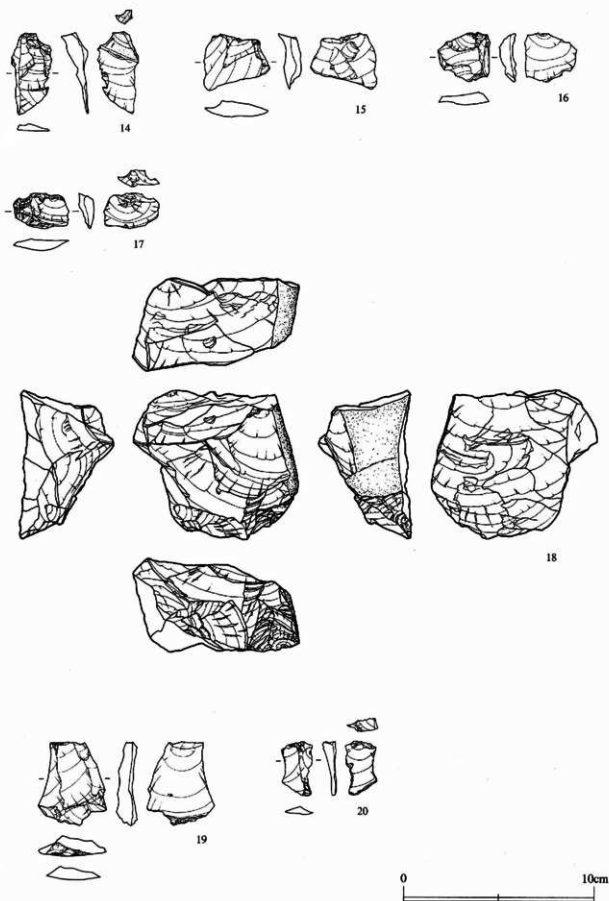
第13図 S I 1904出土石器 (2)



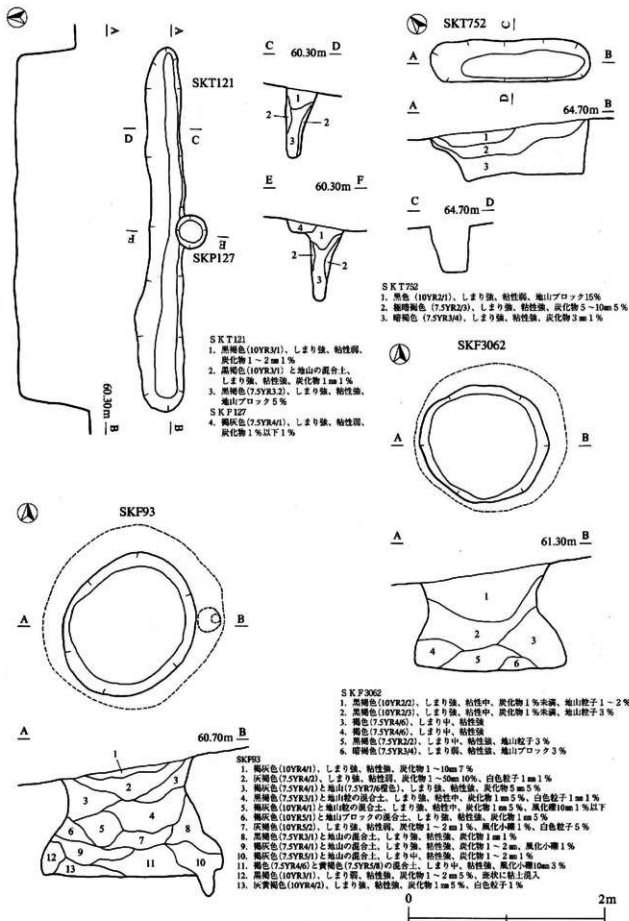
第14圖 S I 1904出土石器 (3)



第15図 S11904出土石器(4)

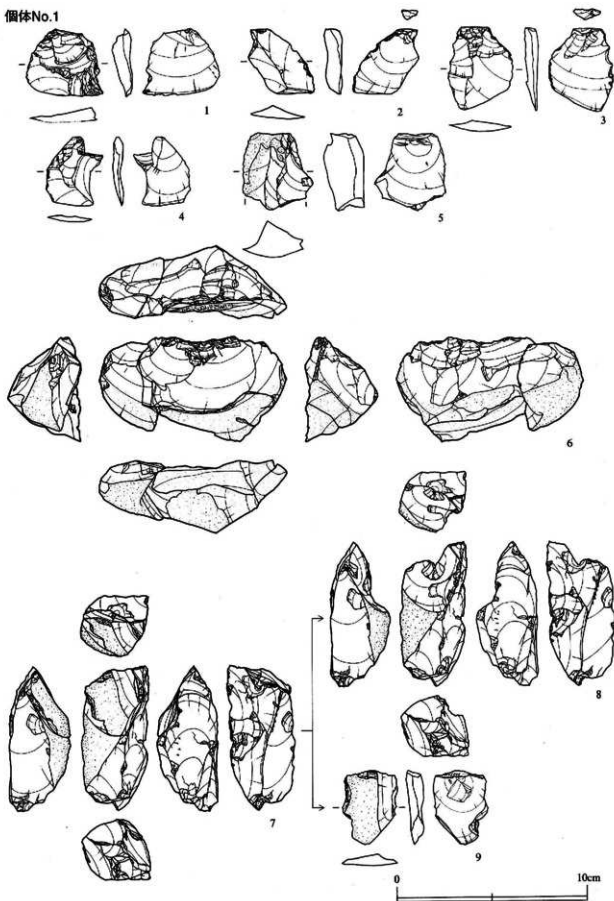


第16図 S I 1904出土石器 (5)

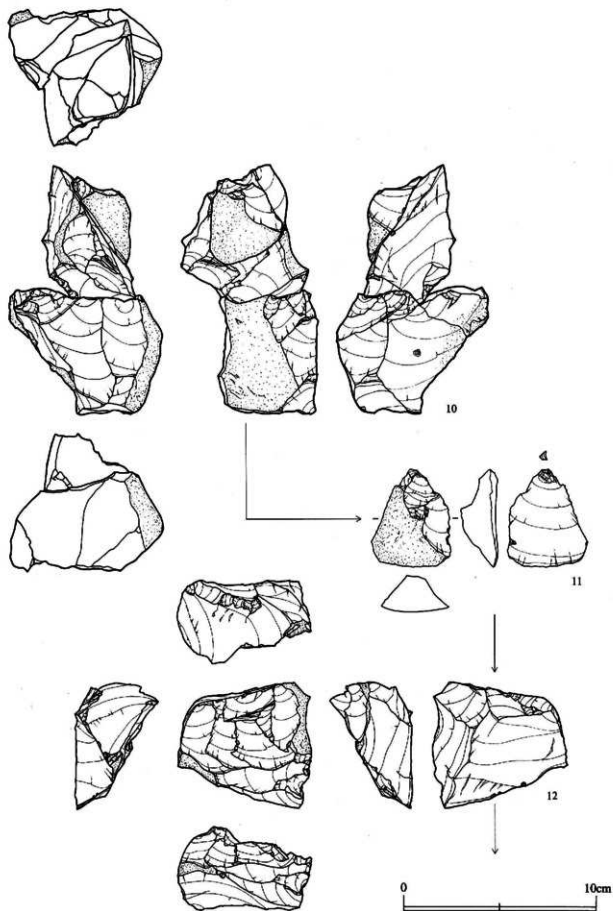


第17図 検出遺構(2) (SKT121・SKT752・SKF93・SKF3062)

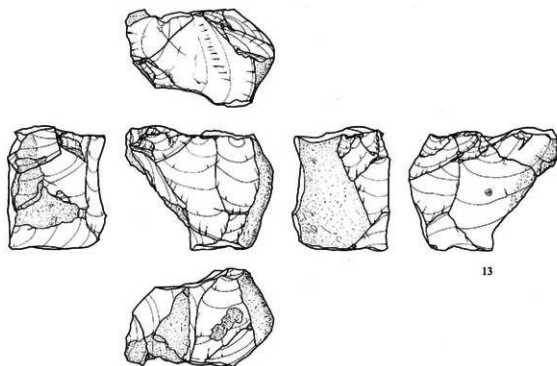
個体No.1



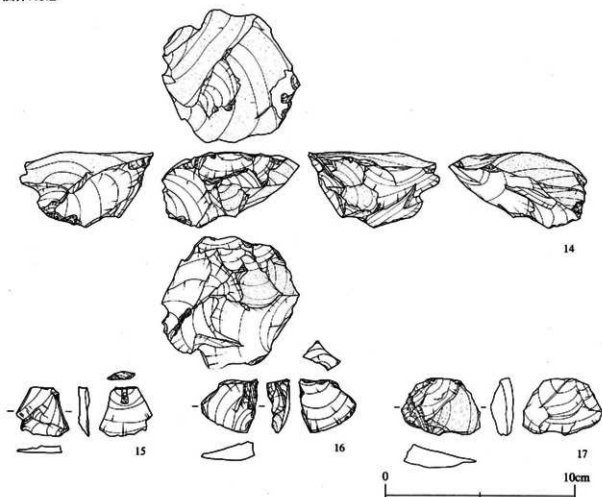
第18図 遺構外出土石器（1）



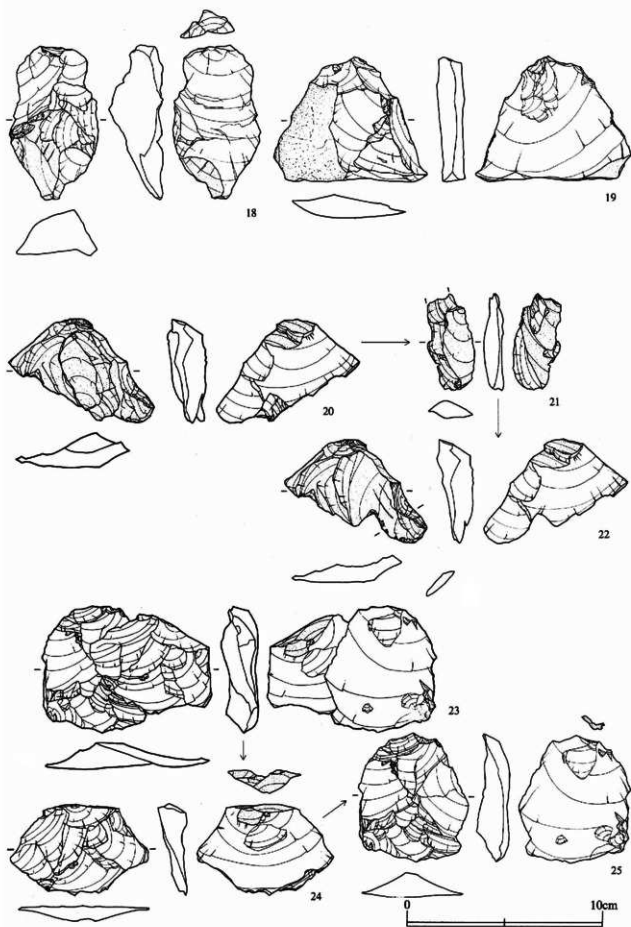
第19図 遺構外出土石器(2)



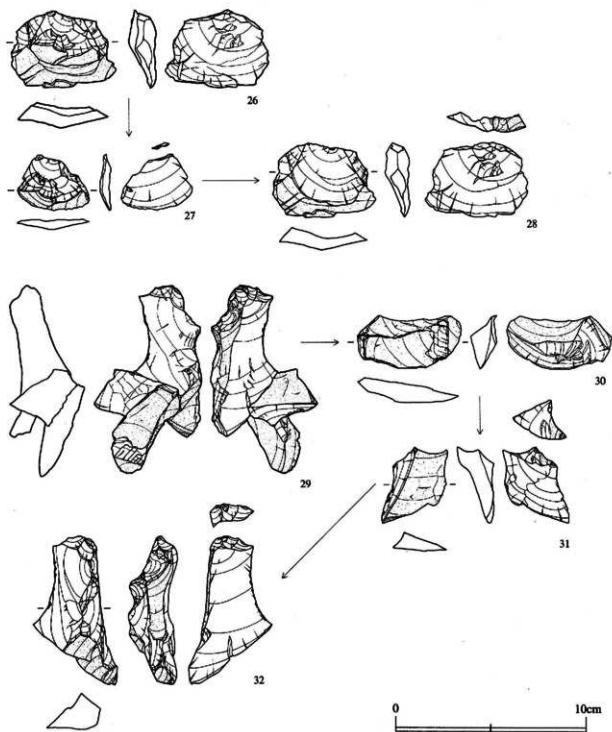
個体No.2



第20図 遺構外出土石器（3）

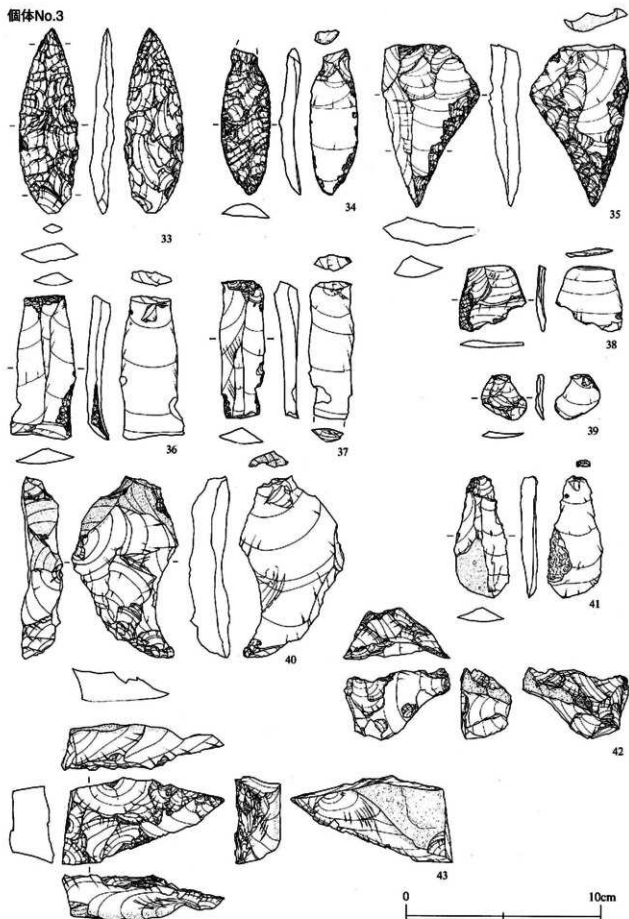


第21図 遺構外出土石器（4）

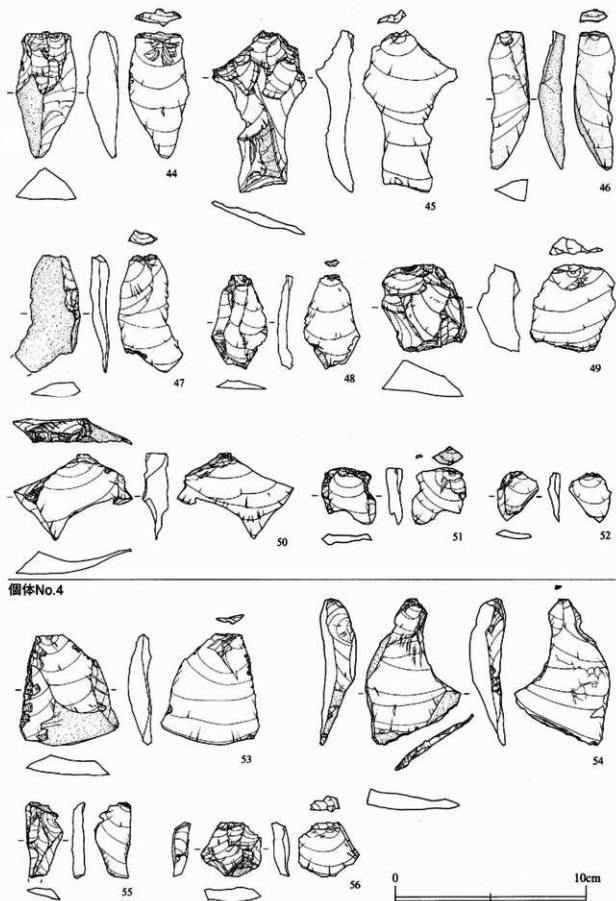


第22図 遺構外出土石器（5）

個体No.3

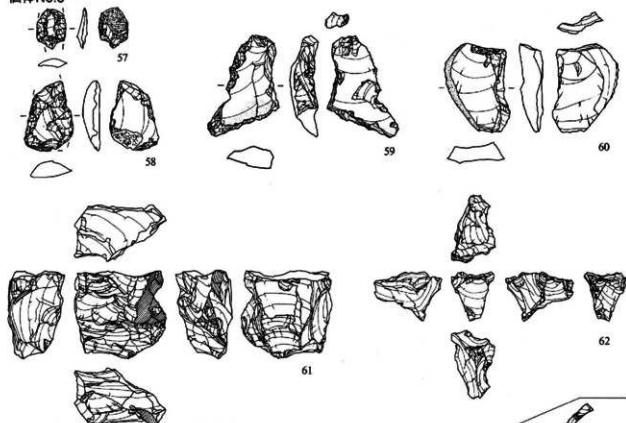


第23図 遺構外出土石器（6）

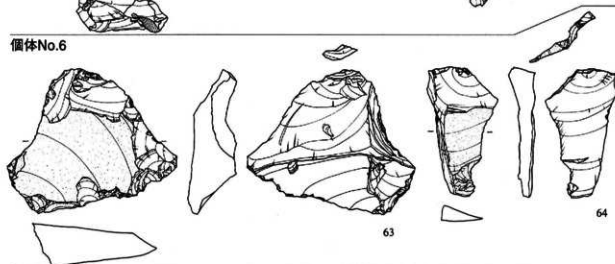


第24図 遺構外出土石器 (7)

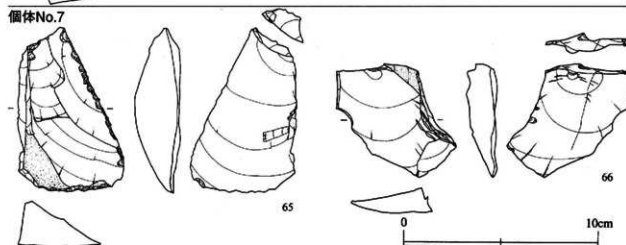
個体No.5



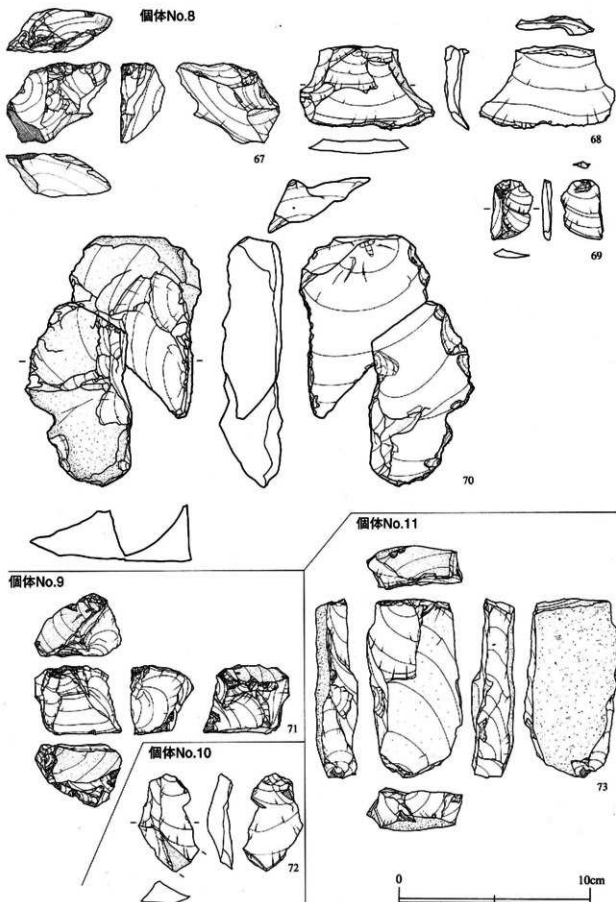
個体No.6



個体No.7

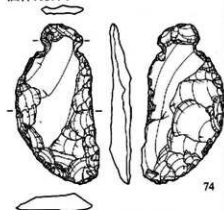


第25図 遺構外出土石器 (8)

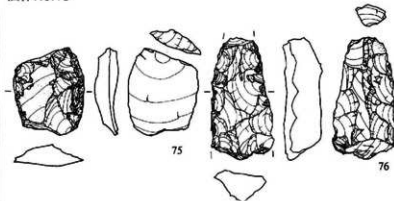


第26図 遺構外出土石器 (9)

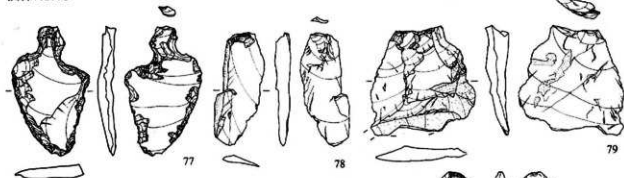
個体No.14



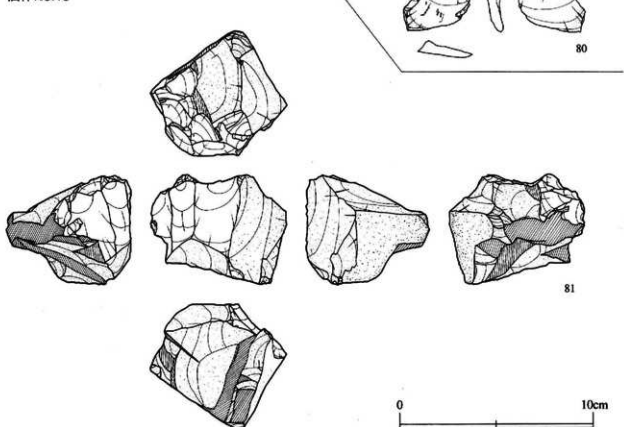
個体No.15



個体No.18

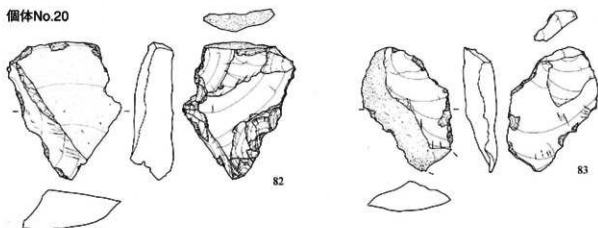


個体No.19

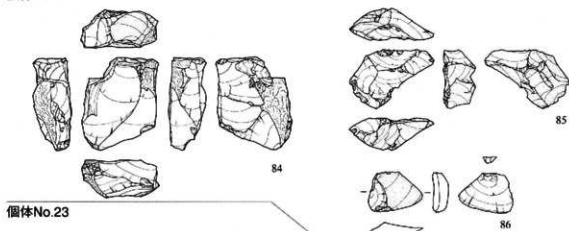


第27図 遺構外出土石器 (10)

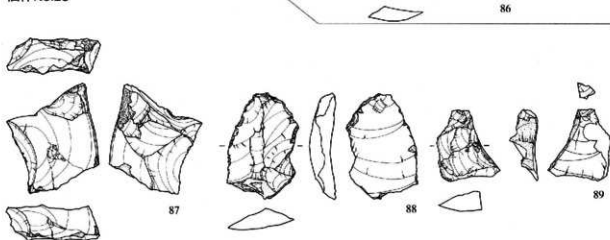
個体No.20



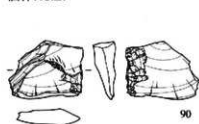
個体No.21



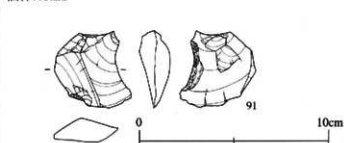
個体No.23



個体No.27

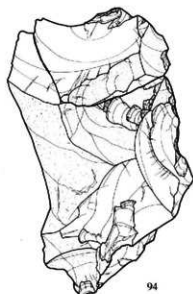
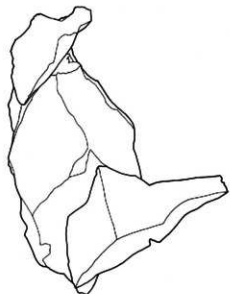
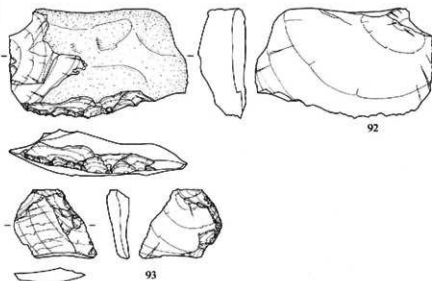


個体No.28

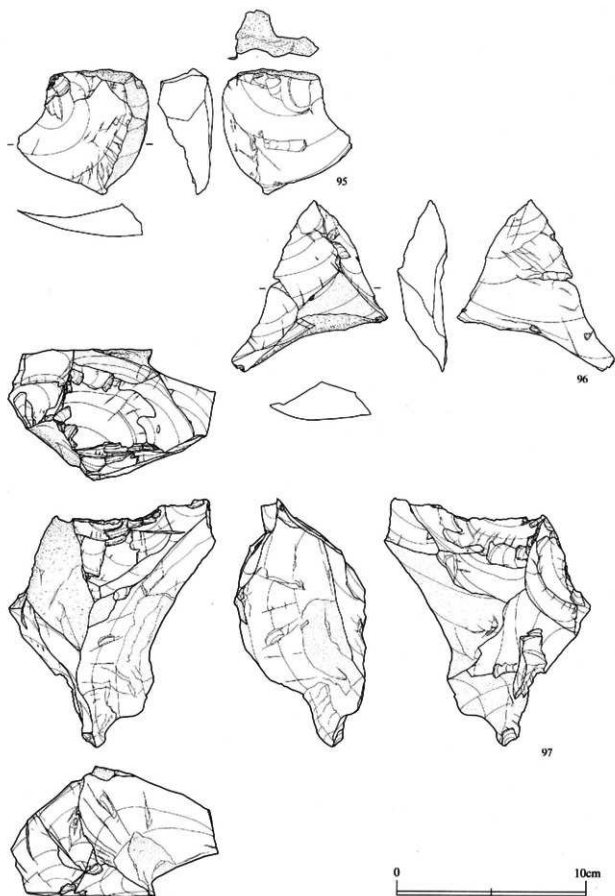


第28図 遺構外出土石器 (11)

個体No.30

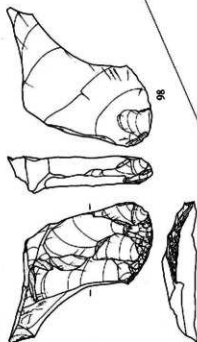


第29図 遺構外出土石器 (12)

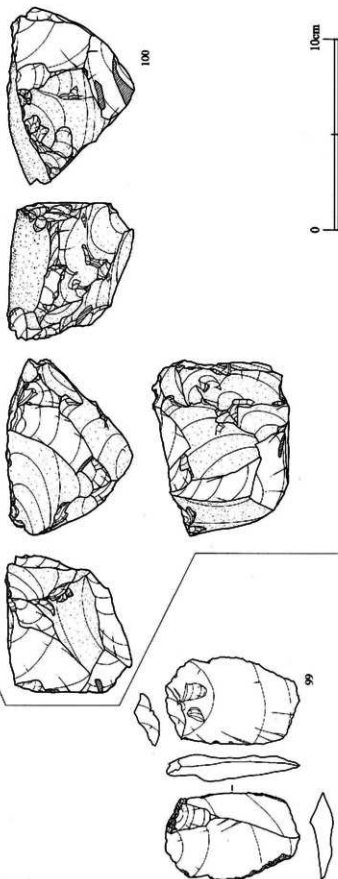


第30圖 遺構外出土石器 (13)

個体No.32

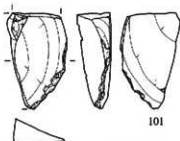


個体No.31

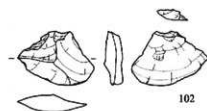


第31図 遺構外出土石器 (14)

個体No.33



101



102

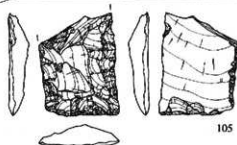
単独個体



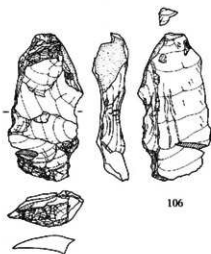
103



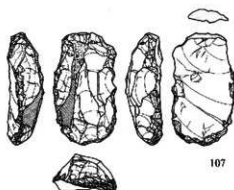
104



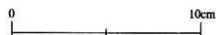
105



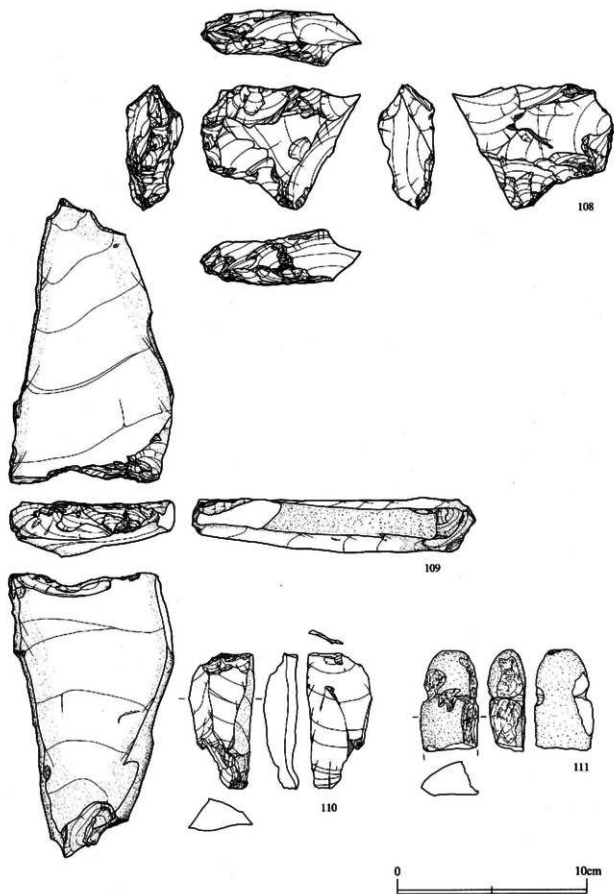
106



107



第32図 遺構外出土石器 (15)



第33図 遺構外出土石器 (16)

挿図	遺物番号	器種	石材	個体	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打面幅	打角
第12図	1	削器	珪質頁岩	A	57	33	10	12.9	9.5	120
第12図	2	二次加工ある剥片	珪質頁岩	A	41	35	14	14.9	—	—
第12図	3	二次加工ある剥片	珪質頁岩	A	41	37	12	15.9	—	—
第15図	4	残核	珪質頁岩	A	40	45	12	15.6	—	—
第15図	5	残核	珪質頁岩	A	40	37	11	16.0	—	—
第15図	6	剥片	珪質頁岩	A	31	49	13	14.1	18.0	100
第15図	7	剥片	珪質頁岩	A	28	32	13	7.8	19.1	118
第15図	8	剥片	珪質頁岩	A	35	32	13	10.7	24.0	106
第15図	9	剥片	珪質頁岩	A	24	34	8	3.2	5.7	109
第15図	10	剥片	珪質頁岩	A	24	25	8	2.6	—	—
第15図	11	剥片	珪質頁岩	A	42	26	11	6.6	—	—
第15図	12	剥片	珪質頁岩	A	23	27	5	2.4	5.7	109
第15図	13	剥片	珪質頁岩	A	35	44	15	14.4	35.0	128
第16図	14	剥片	珪質頁岩	A	42	21	14	5.3	8.2	110
第16図	15	剥片	珪質頁岩	A	29	34	12	7.1	21.3	121
第16図	16	剥片	珪質頁岩	A	16	27	8	4.1	—	—
第16図	17	剥片	珪質頁岩	A	19	29	8	3.5	22.0	115
第12図	A-1-1	剥片	珪質頁岩	A	63	62	14	47.6	3.4	106
第12図	A-1-2	剥片	珪質頁岩	A	41	36	20	17.8	29.1	96
第12図	A-1-3	剥片	珪質頁岩	A	66	28	9	9.2	7.1	100
第12図	A-1-4	削器	珪質頁岩	A	33	19	10	4.8	17.8	114
第12図	A-1-5	剥片	珪質頁岩	A	64	50	18	17.0	16.3	110
第12図	A-2-1	撻器	珪質頁岩	A	53	29	9	12.7	—	—
第12図	A-2-2	剥片	珪質頁岩	A	47	28	12	10.6	15.9	112
第13図	A-3-1	二次加工ある剥片	珪質頁岩	A	32	17	3	1.9	—	—
第13図	A-3-2	剥片	珪質頁岩	A	40	29	10	9.6	—	—
第13図	A-4-1	使用痕ある剥片	珪質頁岩	A	42	36	8	5.3	15.3	123
第13図	A-4-2	二次加工ある剥片	珪質頁岩	A	25	17	5	1.6	4.4	116
第13図	A-4-3	剥片	珪質頁岩	A	40	24	6	3.2	7.9	102
第13図	A-4-4	剥片	珪質頁岩	A	33	22	4	1.9	—	—
第13図	A-4-5	剥片	珪質頁岩	A	38	36	11	11.5	—	—
第13図	A-5-1	剥片	珪質頁岩	A	23	43	9	4.9	24.4	96
第13図	A-5-2	剥片	珪質頁岩	A	37	54	13	16.5	27.3	101
第14図	A-6-1	剥片	珪質頁岩	A	37	46	9	11.0	15.9	108
第14図	A-6-2	剥片	珪質頁岩	A	43	46	14	17.3	31.4	103
第14図	A-6-3	剥片	珪質頁岩	A	39	50	13	13.5	15.1	109
第14図	A-7-1	剥片	珪質頁岩	A	24	45	11	7.4	—	—
第14図	A-7-2	剥片	珪質頁岩	A	44	40	12	13.0	25.9	132
第14図	A-7-3	剥片	珪質頁岩	A	65	36	11	15.3	—	—
第14図	A-7-4	剥片	珪質頁岩	A	65	27	10	13.2	23.8	103
第14図	A-7-5	剥片	珪質頁岩	A	57	40	10	19.7	26.6	109
第15図	A-8-1	剥片	珪質頁岩	A	27	20	7	2.6	16.7	111
第15図	A-8-2	剥片	珪質頁岩	A	67	20	9	7.9	—	—
第15図	A-8-3	剥片	珪質頁岩	A	45	19	9	5.1	14.0	110
第15図	A-8-4	剥片	珪質頁岩	A	60	23	12	15.2	17.6	118
第16図	18	残核	珪質頁岩	B	78	88	49	323.0	—	—
	21	剥片	珪質頁岩	B	36	52	18	19.4	—	—
	22	剥片	珪質頁岩	B	41	38	7	8.6	—	—
第16図	19	撻器	珪質頁岩	C	44	41	11	13.2	18.1	107
第16図	20	使用痕ある剥片	珪質頁岩	D	28	17	7	2.1	15.9	95

第2表 S I 1904出土石器観察表

個体No	石鏃	石槍	石匙	石鐮	両面調整石器	削器	掻器	二次加工ある剥片	残核	剥片	碎片	その他	小計
1								3	4	10			17
2								1	1	17			19
3		1	1			3		5	2	16			28
4						1		1		3			5
5	1			1		1			4	16	4		27
6										8			8
7						1		1		1			3
8										7			7
9									1	5			6
10										2			2
11									1	1			2
12										3			3
13										2			2
14			1							2			3
15					1	2							3
16										4			4
17								1		2			3
18			1					2		17			20
19									2	1			3
20						2		2		7			11
21									2	8			10
22								1		2			3
23								2	1	2			5
24										3			3
25								1		2			3
26								1		6			7
27						1				1			2
28						1				2			3
29								1		1			2
30						2		1	1	9			13
31							1	3		2			6
32									1	1			2
33								1		1			2
単独	2			1			2	1	4	8		1	19
合計	3	1	3	2	1	14	3	28	24	172	4	1	256

第3表 遺構外出土石器個体別組成表

棟号	番号	部種	出土地区	層位	石材	個体	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
第18回	1	二次加工ある割片	L O 48	■	埴貫瓦岩	1	35	40	10	10.5	
第18回	2	二次加工ある割片	S X 2513		埴貫瓦岩	1	34	35	11	7.4	
第18回	3	割片	L T 48	■	埴貫瓦岩	1	44	34	7	7.6	
第18回	4	割片	L S 49	■	埴貫瓦岩	1	36	30	6	4.2	
第18回	5	割片	表採		埴貫瓦岩	1	31	37	21	25.4	
第18回	6	残核	L H 25 (K 2 - A)		埴貫瓦岩	1	42	77	37	90.3	
第18回	6	割片	L H 25 (K 2 - A)		埴貫瓦岩	1	24	62	18	8.8	
第18回	6	割片	L H 25 (K 2 - A)		埴貫瓦岩	1	42	29	39	30.1	
第18回	8	残核	M C 43	■	埴貫瓦岩	1	76	35	32	68.1	
第18回	9	二次加工ある割片	M A 50		埴貫瓦岩	1	30	39	9	9.4	
第19回	11	割片	S K P 902		埴貫瓦岩	1	51	42	19	28.0	
第19回	12	残核	L F 39	V	埴貫瓦岩	1	66	75	41	154.7	
第20回	13	残核	L F 39	■	埴貫瓦岩	1	62	76	51	280.0	
		割片	L G 37	■	埴貫瓦岩	1	37	30	21	15.2	
		割片	M E 46	■	埴貫瓦岩	1	42	66	29	68.5	
		割片	L O 48	■	埴貫瓦岩	1	55	41	16	23.4	
		割片	C 区表採		埴貫瓦岩	1	49	46	14	27.8	
第20回	14	残核	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	40	73	70	149.7	
第20回	15	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	26	28	6	3.8	
第20回	16	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	28	30	12	7.8	
第20回	17	割片	L T 47	■	埴貫瓦岩	2	31	42	12	11.0	
第21回	18	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	80	45	29	58.0	
第21回	19	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	65	80	15	63.4	
第21回	21	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	49	25	10	8.2	
第21回	22	二次加工ある割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	53	74	19	28.5	
第21回	24	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	47	71	15	21.2	
第21回	25	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	65	57	17	52.4	
第26回	27	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	29	37	6	4.8	
第26回	28	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	39	54	13	20.2	
第26回	30	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	28	55	14	15.4	
第26回	31	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	40	35	19	10.0	
第26回	32	割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	78	44	25	41.8	
		割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	28	13	9	2.4	
		割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	17	16	4	1.0	
		割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	19	21	4	1.4	
		割片	L G 45	■	埴貫瓦岩	2	30	21	7	2.7	
第23回	33	石槌	M E 56		埴貫瓦岩	3	95	30	12	28.5	
第23回	34	石匙	S N 361		埴貫瓦岩	3	75	25	11	16.0	
第23回	35	煎器	M E 54	■	埴貫瓦岩	3	83	51	16	44.6	
第23回	36	煎器	S W 3831	I	埴貫瓦岩	3	74	34	12	22.4	
第23回	37	二次加工ある割片	S W 3831	I	埴貫瓦岩	3	71	24	13	18.2	
第23回	38	煎器	L S 35 (N 4 - G)		埴貫瓦岩	3	34	34	5	4.3	
第23回	39	二次加工ある割片	表採		埴貫瓦岩	3	23	23	4	1.6	
第23回	40	二次加工ある割片	L P 57	■	埴貫瓦岩	3	94	55	21	76.2	
第23回	41	割片	M B 38	■	埴貫瓦岩	3	63	29	9	11.5	
第23回	42	残核	L O 57 谷		埴貫瓦岩	3	26	55	26	35.3	
第23回	43	残核	M D 42		埴貫瓦岩	3	45	84	24	70.9	
第24回	44	割片	M K 69	■	埴貫瓦岩	3	67	32	17	29.3	
第24回	45	割片	L Q 57	■	埴貫瓦岩	3	85	50	21	24.1	
第24回	46	割片	L N 58	■	埴貫瓦岩	3	72	21	14	14.6	
第24回	47	割片	L S 51	■	埴貫瓦岩	3	62	34	10	12.5	
第24回	48	割片	S D 374 - B		埴貫瓦岩	3	50	30	8	7.0	
第24回	49	割片	L S 50	■	埴貫瓦岩	3	46	45	23	34.5	
第24回	50	割片	M E 38 (L 2 - I)		埴貫瓦岩	3	45	62	14	17.3	
第24回	51	割片	L N 57	■	埴貫瓦岩	3	30	28	9	4.3	
第24回	52	割片	C 区沢内		埴貫瓦岩	3	26	22	6	1.7	
		二次加工ある割片	表採		埴貫瓦岩	3	31	33	11	10.0	
		二次加工ある割片	L P 52	■	埴貫瓦岩	3	48	56	26	52.8	
		割片	M B 45		埴貫瓦岩	3	26	26	9	6.0	
		割片	L K 50	■	埴貫瓦岩	3	75	84	32	150.3	
		割片	L T 50	■	埴貫瓦岩	3	20	55	8	8.1	
		割片	範囲外		埴貫瓦岩	3	65	57	19	49.1	
		割片	L D 44 (I 3)		埴貫瓦岩	3	65	39	16	28.0	
		割片	L O 49		埴貫瓦岩	3	36	28	15	11.5	
第24回	53	煎器	M J 72 表採		埴貫瓦岩	4	58	52	12	29.8	
第24回	54	二次加工ある割片	L Q 41	■	埴貫瓦岩	4	77	50	19	37.4	

第4表 遺構外出土石器観察表(1)

第4章 調査の記録

検出	番号	器種	出土地区	層位	石材	個体	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
	55	剥片	L P46	Ⅲ	珸質頁岩	4	39	19	7	3.6	
第24図	56	剥片	L B41(C1-A)		珸質頁岩	4	29	32	10	8.8	
		剥片	S X5411		珸質頁岩	4	27	19	6	1.1	
第25図	57	石鏃	L T47(K6-J)		珸質頁岩	5	21	15	6	1.0	被熱痕あり
	58	石鏃	L L45	Ⅲ	珸質頁岩	5	36	15	9	7.2	被熱痕あり
第25図	59	削器	L N55	Ⅲ	珸質頁岩	5	52	37	15	18.7	
	60	剥片	S K1503		珸質頁岩	5	46	34	12	15.5	
第25図	61	残核	M B53	Ⅲ	珸質頁岩	5	45	47	34	64.6	
	62	残核	M B45		珸質頁岩	5	25	23	35	12.5	
		残核	M B43		珸質頁岩	5	92	86	56	479.7	
		調整剥片	L J41	Ⅳ	珸質頁岩	5	20	20	3	0.7	
		剥片	M B45		珸質頁岩	5	93	85	34	233.1	
		剥片	L O42		珸質頁岩	5	39	18	14	6.2	
		砕片			珸質頁岩	5	12	9	3	0.3	
		砕片			珸質頁岩	5	11	10	3	0.2	
		砕片			珸質頁岩	5	6	10	1	0.1	
		砕片			珸質頁岩	5	7	9	3	0.2	
		残核	L N54	Ⅲ	珸質頁岩	5	56	45	27	69.9	
		剥片	M J41周辺	Ⅲ	珸質頁岩	5	51	51	31	80.4	
		剥片	L T48		珸質頁岩	5	42	41	30	40.5	
		剥片	L T47		珸質頁岩	5	18	30	11	3.9	
		剥片	L T47(K6-J)		珸質頁岩	5	32	22	8	4.6	
		剥片	L L54	Ⅲ	珸質頁岩	5	28	27	12	8.2	
		剥片	M A60	Ⅲ	珸質頁岩	5	24	26	26	10.7	
		剥片	L O36		珸質頁岩	5	32	33	10	8.1	
		剥片	L T37		珸質頁岩	5	37	35	12	11.6	
		剥片	S K P1613		珸質頁岩	5	19	19	9	2.1	
		剥片	L T45	Ⅳ	珸質頁岩	5	35	17	13	6.4	
		剥片	S K4400		珸質頁岩	5	13	38	10	4.5	
		剥片	M B43	Ⅲ-Ⅳ	珸質頁岩	5	31	10	16	3.1	
第25図	63	剥片	S K P2215		珸質頁岩	6	75	87	25	105.1	
第25図	64	剥片	M E54	Ⅲ	珸質頁岩	6	67	37	14	13.3	
		剥片	L P36	Ⅳ	珸質頁岩	6	52	38	6	5.6	
		剥片	M I47	Ⅳ	珸質頁岩	6	39	56	19	33.4	
		剥片	L S33(H2E)		珸質頁岩	6	61	80	19	66.6	
		剥片	S K P2871		珸質頁岩	6	31	49	17	20.5	
		剥片	M J47		珸質頁岩	6	55	22	15	9.9	
		剥片	表録		珸質頁岩	6	16	28	3	1.1	
第25図	65	削器	L P46	Ⅲ	珸質頁岩	7	85	55	24	78.2	
第25図	66	剥片	L S50	Ⅲ	珸質頁岩	7	59	63	16	78.2	
		二次加工ある剥片	L E35	Ⅳ	珸質頁岩	7	82	71	13	58.9	
第26図	67	残核	L O51 L P51	Ⅲ	珸質頁岩	8	42	54	23	37.5	
第26図	68	剥片	L O58分		珸質頁岩	8	44	71	13	30.9	
第26図	69	剥片	S K P6237		珸質頁岩	8	31	22	5	3.1	
第26図	70	剥片	L E40	Ⅲ	珸質頁岩	8	97	55	35	155.8	
第26図	70	剥片	L E41	Ⅲ	珸質頁岩	8	95	70	32	163.8	
		剥片	L R49	Ⅲ	珸質頁岩	8	74	59	18	56.9	
		剥片	M C67(Q2-B)		珸質頁岩	8	50	55	12	22.3	
第26図	71	残核	L M56		珸質頁岩	9	36	45	33	30.9	
		剥片	S K5705		珸質頁岩	9	49	30	16	15.0	
		剥片	S K5705		珸質頁岩	9	50	44	23	30.3	
		剥片	L S44 L T44	Ⅲ	珸質頁岩	9	34	44	30	30.6	
		剥片	L T47		珸質頁岩	9	30	40	24	23.5	
		剥片	表録		珸質頁岩	9	12	25	6	1.3	
第26図	72	剥片	L N46	I	珸質頁岩	10	51	32	13	13.5	
		剥片	S K4400		珸質頁岩	10	26	21	19	11.9	
第26図	73	残核	L D35	Ⅲ	珸質頁岩	11	94	51	23	121.5	
		剥片	L D35	Ⅳ	珸質頁岩	11	44	44	17	20.9	
		剥片	M L38	Ⅲ	珸質頁岩	12	45	36	6	8.6	
		剥片	C区区内		珸質頁岩	12	18	28	3	1.4	
		剥片	L C32(A1-J)		珸質頁岩	12	30	28	6	3.2	
		剥片	L M53	Ⅲ	珸質頁岩	13	48	64	11	18.9	
		剥片	L O50	Ⅳ	珸質頁岩	13	41	41	10	15.4	
第27図	74	石鏃	L R49	Ⅲ	珸質頁岩	14	83	43	12	36.0	
		剥片	L P56		珸質頁岩	14	41	41	8	6.4	
		剥片	L P56		珸質頁岩	14	22	41	12	13.1	

第5表 遺構外出土石器観察表(2)

種別	番号	器種	出土地区	層位	石材	個体	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
第27回	75	削器	L N56	Ⅲ	珧質頁岩	15	46	37	12	19.2	被熱痕あり
第27回	76	両面調整石器	L R39	Ⅳ	珧質頁岩	15	63	32	20	41.4	
		削器	L F36	Ⅲ	珧質頁岩	15	60	84	28	120.4	残核転用
		剥片	L P47		珧質頁岩	16	55	55	18	45.3	
		剥片	L S50	Ⅲ	珧質頁岩	16	73	83	20	79.4	
		剥片	MA48	Ⅳ	珧質頁岩	16	50	51	11	20.5	
		剥片	L P47		珧質頁岩	16	45	30	18	7.2	
		二次加工ある剥片	MN69(G6-B)		珧質頁岩	17	52	48	10	14.4	
		剥片	L R37(O1-C)		珧質頁岩	17	54	57	20	52.4	
		剥片	L C38	Ⅳ	珧質頁岩	17	26	24	4	1.6	
第27回	77	石匙	I-2-Q		珧質頁岩	18	67	39	6	15.6	
第27回	78	剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	59	26	8	7.2	
第27回	79	剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	57	55	12	26.7	
第27回	80	剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	48	37	10	9.8	
		剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	55	49	20	38.5	
		剥片	L P57		珧質頁岩	18	53	46	11	13.5	
		二次加工ある剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	60	55	15	39.7	
		二次加工ある剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	33	35	11	15.6	
		調整剥片	L O56		珧質頁岩	18	23	10	3	0.7	
		剥片	MA50	Ⅲ	珧質頁岩	18	30	34	3	3.9	
		剥片	MI53		珧質頁岩	18	60	72	8	22.8	
		剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	47	41	7	8.9	
		剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	34	33	12	8.2	
		剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	45	22	11	6.8	
		剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	36	29	11	5.1	
		剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	61	51	12	28.5	
		剥片	L G45	V	珧質頁岩	18	32	41	16	14.6	
		剥片	L B28		珧質頁岩	18	23	26	8	3.1	
		剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	18	79	42	23	46.3	
		剥片	MH53		珧質頁岩	18	46	30	13	13.0	
第27回	81	残核	M G67		珧質頁岩	19	54	71	67	215.2	
		残核	MH42		珧質頁岩	19	70	64	64	219.5	
		剥片	L M50	Ⅲ	珧質頁岩	19	58	20	17	15.9	
第28回	82	削器	C区区内		珧質頁岩	20	73	60	23	82.5	
第28回	83	削器	L M50	Ⅲ	珧質頁岩	20	66	49	13	39.1	
		二次加工ある剥片	MC56	Ⅲ	珧質頁岩	20	58	42	13	16.9	
		剥片	ME57	Ⅲ	珧質頁岩	20	78	57	26	80.0	
		二次加工ある剥片	L T47		珧質頁岩	20	39	23	16	8.6	
		剥片	S K P4034		珧質頁岩	20	76	53	42	42.2	
		剥片	L L50	Ⅲ	珧質頁岩	20	56	76	27	136.7	
		剥片	S K867		珧質頁岩	20	51	45	15	26.0	
		剥片	S X2513		珧質頁岩	20	43	22	11	7.9	
		剥片	S K1126		珧質頁岩	20	29	25	18	9.9	
		剥片	MD55		珧質頁岩	20	38	23	9	7.8	
第28回	84	残核	MB47	Ⅳ	珧質頁岩	21	49	41	20	48.5	
第28回	85	残核	L O34	Ⅳ	珧質頁岩	21	31	45	17	13.6	剥片素材
第28回	86	剥片	MA45	攪乱	珧質頁岩	21	21	29	8	4.8	
		剥片	M J42周辺	Ⅲ	珧質頁岩	21	54	60	13	36.5	
		剥片	MA45	攪乱	珧質頁岩	21	25	27	10	6.6	
		剥片	MA45	攪乱	珧質頁岩	21	17	29	7	2.7	
		剥片	S K38	Ⅲ	珧質頁岩	21	41	41	13	17.6	
		剥片	MD54		珧質頁岩	21	19	66	33	42.1	
		剥片	MA45	攪乱	珧質頁岩	21	21	28	10	4.0	
		剥片	MA45	攪乱	珧質頁岩	21	47	46	28	31.4	
		剥片	S K1549		珧質頁岩	22	42	35	13	11.5	
		二次加工ある剥片	表探		珧質頁岩	22	42	42	10	10.9	
		剥片	S I2550		珧質頁岩	22	73	39	53	118.3	
第28回	87	残核	L S42	Ⅲ・Ⅳ	珧質頁岩	23	58	49	18	35.3	剥片素材
第28回	88	二次加工ある剥片	L N50	Ⅳ	珧質頁岩	23	56	38	14	21.2	
第28回	89	剥片	M G44表探		珧質頁岩	23	38	34	15	9.8	
		二次加工ある剥片	表探		珧質頁岩	23	29	39	6	5.5	
		剥片	L T47		珧質頁岩	23	71	43	13	27.9	
		剥片	MD48		珧質頁岩	24	37	44	12	11.3	
		剥片	L S44 L T44	Ⅲ	珧質頁岩	24	77	58	18	34.7	
		剥片	L G45	Ⅳ	珧質頁岩	24	30	32	9	6.5	
		剥片	L Q40(C3-C)		珧質頁岩	25	33	28	8	5.1	

第6表 遺構外出土石器観察表(3)

採回	番号	器種	出土地区	層位	石材	個体	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
		二次加工ある剥片	MD49	IV	珪質頁岩	25	38	38	10	9.7	
		磨製剥片	MI55(N7-H)		珪質頁岩	25	12	15	3	0.3	
		剥片	MA45	III	珪質頁岩	26	35	25	10	4.8	
		二次加工ある剥片	LN55	III	珪質頁岩	26	32	51	17	31.0	
		剥片	LR35		珪質頁岩	26	40	40	17	14.4	
		剥片	SK5018		珪質頁岩	26	24	24	6	3.3	
		剥片	LN50	IV	珪質頁岩	26	68	27	27	42.9	
		剥片	LT45	III	珪質頁岩	26	20	28	9	3.5	
		剥片	LP52	III	珪質頁岩	26	37	39	22	14.0	
第28回	90	削器	LM52	IV	珪質頁岩	27	31	40	12	12.7	
		剥片	LP57		珪質頁岩	27	71	60	10	32.9	
第28回	91	削器	MK38	III	珪質頁岩	28	41	41	16	21.5	
		剥片	LO58谷		珪質頁岩	28	52	53	13	25.9	使用痕あり
		剥片	LT47		珪質頁岩	28	47	29	13	14.6	
		二次加工ある剥片	LS49	III	珪質頁岩	29	93	81	36	175.1	
		剥片	LJ36	V	珪質頁岩	29	24	77	26	59.4	
第29回	92	削器	LS50	III	珪質頁岩	30	59	94	25	139.6	
第29回	93	削器	MB45	III	珪質頁岩	30	37	44	12	13.5	
第30回	95	剥片	LC37	III	珪質頁岩	30	67	69	29	79.9	
第30回	96	剥片	LC38	IV	珪質頁岩	30	91	84	26	82.3	
第30回	97	残核	LC38	IV	珪質頁岩	30	131	109	70	558.9	
		二次加工ある剥片	SK4875		珪質頁岩	30	66	62	29	102.4	
		剥片	LN56	III	珪質頁岩	30	91	80	20	125.6	
		剥片	LK40	III	珪質頁岩	30	70	60	18	70.5	
		剥片	LG38	IV	珪質頁岩	30	82	89	22	99.1	
		剥片	LS47	III	珪質頁岩	30	86	42	24	77.8	
		剥片	LJ40		珪質頁岩	30	53	74	12	38.2	
		剥片	MG52		珪質頁岩	30	32	51	23	26.9	
		剥片	LC37	IV	珪質頁岩	30	35	67	19	29.7	
第31回	98	削器	LO58谷		珪質頁岩	31	76	74	19	64.7	
第31回	99	二次加工ある剥片	南側表採		珪質頁岩	31	70	46	14	35.5	
		二次加工ある剥片	南側表採		珪質頁岩	31	39	54	12	15.9	
		二次加工ある剥片	MD55		珪質頁岩	31	108	89	33	188.1	
		剥片	SKP5088		珪質頁岩	31	60	59	11	26.4	
		剥片	LK50	III	珪質頁岩	31	46	30	5	5.9	使用痕あり
第31回	100	残核	LP47	III	珪質頁岩	32	75	74	69	465.1	
		剥片	MB42表採		珪質頁岩	32	40	53	12	21.2	
第32回	101	二次加工ある剥片	LQ42		安山岩	33	51	32	18	21.1	
第32回	102	剥片	表採		安山岩	33	28	41	10	7.3	
第32回	103	石鏃	SS3		珪質頁岩	単独	22	18	6	2.0	被熱痕あり
第32回	104	石鏃	LP43	IV	珪質頁岩	単独	24	17	5	1.4	
第32回	105	石鏃	LP58		珪質頁岩	単独	55	39	11	23.3	
第32回	106	残核	LM55	III	珪質頁岩	単独	79	40	19	45.2	
第32回	107	残核	SKP5753		珪質頁岩	単独	59	34	20	44.7	
第33回	108	残核	A区表採		珪質頁岩	単独	66	85	29	125.4	
第33回	109	残核	SK5838		珪質頁岩	単独	29	87	151	399.8	
第33回	110	剥片	SW3805		珪質頁岩	単独	72	35	18	35.6	
第33回	111	有溝石製品	LQ57	III	凝灰岩	単独	54	31	20	27.8	
		二次加工ある剥片	LR35	III	珪質頁岩	単独	25	30	10	6.4	
		剥片	表採		珪質頁岩	単独	66	73	29	108.9	
		剥片	LQ47	III	珪質頁岩	単独	66	63	19	55.8	
		剥片	MK72		珪質頁岩	単独	42	38	12	12.3	
		残核	LT47		珪質頁岩	単独	63	42	18	42.8	
		残核	LM57谷		珪質頁岩	単独	69	40	29	83.6	
		剥片	LP38		珪質頁岩	単独	39	27	10	7.2	
		剥片	表採		珪質頁岩	単独	44	40	12	28.0	
		剥片	LM47	III	珪質頁岩	単独	75	49	13	41.5	
		剥片	LL56		珪質頁岩	単独	63	42	15	34.5	

第7表 遺構外出土石器観察表(4)

第5章 まとめ

小林遺跡では、縄文時代に帰属する遺構として、堅穴住居跡1軒・陥し穴状土坑2基・フラスコ状土坑2基が検出された。遺跡は調査範囲の東西に広がることが予測されるが、堅穴住居跡は調査範囲のほぼ中央に位置しており、その周囲には当該期の住居跡が検出されていないことから、未調査区を含めても小規模な集落、もしくは限定的な機能をもった場と推測される。

本章では、堅穴住居跡内および遺構外から出土した、比較的良好的な縄文時代中期後葉の石器群を石器製作過程の面から検討し、遺跡の性格について若干の考察を行いたい。

(1) 堅穴住居跡内出土石器群の検討

小林遺跡では、堅穴住居跡内においてほぼ同一個体（個体別資料No. A）からなる石器集中部が検出された。接合作業の結果、接合例が合計8例得られた。これら同一個体の接合例とその他の剥片・残核・製品をもとに、石器製作過程について検討を試みたい。

接合例や剥片には、礫面・風化面を大きく残すものと残さないものがある。前者は剥片剥離過程のより前半の、後者はより後半の段階を示していると考えられる。接合例A-1・2は表面のほぼ全体が礫面・風化面に覆われている。接合例A-3～6は一部に礫面を残している。これらの接合例からは、単剥離面打面や90度・180度打面転位により、おもにすづまりの縦長剥片～横長幅広剥片が剥離されていることがわかる。一方、接合例A-7・8には礫面がほとんどみられず、単・複剥離面打面から「石刃状剥片」と呼ぶ縦長剥片を連続的に剥離していることがうかがえる。

接合しなかった剥片を観察すると、横長幅広剥片が大半を占め、礫面を残さないものが多い。これらの剥片には、打面調整や頭部調整などの石核整形がみられる。また、石核はすべて横長幅広剥片を素材としている。一方、製品には礫面を残すものと残さないものがあり、素材は縦長～横長幅広剥片が認められる。

これらの資料をもとに当該期の石器製作過程を復元するとつぎのようになる。①珪質頁岩の原石を多方向からの剥離により石核整形する段階。②打面調整・頭部調整を施し、縦長剥片を剥離するための石核を準備する段階。③縦長剥片を同一打面から連続的に剥離する段階。④石核の消耗に伴い、再度多方向からの剥離により小形の横長幅広剥片を剥離する段階。⑤各段階において得られた剥片から石器素材を選択し、製品に仕上げる段階。

以上のように石器製作過程は復元されるが、このなかで特筆すべきは段階③である。縄文時代における縦長剥片剥離技術の存在は、すでに宮城県大梁川遺跡などで指摘されている^(註1)。また、会田容弘は、中期後葉における山形・宮城県下の頁岩製石刃製作について検討し、「頁岩製石刃」の流通・交易形態にまで言及している^(註2)。その中で、縦長剥片は縦型の石匙などの素材となっているらしい。小林遺跡では遺構内外で縦長剥片を素材とする削器・石匙・二次加工ある剥片などがあり、素材との相関関係をうかがわせる。

本来、縦長剥片を連続的に剥離する過程は後期旧石器時代に顕著に見られるが、東北地方では縄文時代中期に突如出現し、後期中葉にはみられなくなる。県内で同様の資料が報告されているのは琴丘町盤岩台遺跡のみであるが、おそらく、東北地方では縄文時代中期において、縦長剥片剥離技術が普

遍的に見られるのではないだろうか。そうすると、後期旧石器時代の縦長剥片と識別することが必要となるが、現状では困難である。今後、多角的な分析により、その識別方法を見出さなければならぬだろう。

(2) 遺構外出土石器について

遺構外からは合計259点の石器が出土した。調査区全体にわたって、散漫に分布し、集中部は認められなかった。これらの石器の特徴として、以下の点を挙げることができる。

- ① 製品と残滓の比率を見ると、製品が全体の20%以上を占め、比較的割合が高い。
- ② 各個体を構成する石器点数は、多くても個体別資料No. 3で28点、平均すると7点で、個体毎の点数は少ない。

この2点からは、遺跡内でまとまった石器製作作業がおこなわれていたとは言い難い。むしろ、素材や製品の搬入と使用・廃棄、部分的な剥片剥離作業が中心となっているといえよう。つまり、次項で検討するS I 1904出土石器群との類似性が指摘できる。遺構外出土石器の詳細な時期は不明であるが、S I 1904との共通性から、ここでは縄文時代中期に比定しておきたい。

(3) 縄文時代中期後葉の石器群と遺跡の性格

さてここで、石器製作作業のあり方から小林遺跡の性格を考察する。

はじめに、堅穴住居跡内出土石器群を検討したい。

個体別資料No. Aに関しては、1. 遺跡内において原石から剥片剥離がおこなわれたと考えるには、礫面を残す剥片が少ない。2. 住居内にみられる製品からは前述の段階③で剥離された縦長剥片との強い結びつきは認められない。3. 最終的な残核は遺跡内において出土しなかった。4. 接合例には間隙があり、接合しない剥片もある、といった点から、石器原料や製品は、住居（遺跡）内への搬入・住居（遺跡）外への搬出があったと推察される。すなわち、個体別資料No. Aは石器製作過程の途中段階もしくは断片を示しているといえよう。一方、個体別資料No. Bは残核と剥片・断片がわずかにみられ、石器製作過程の最終段階を示している。また、個体別資料No. CとNo. Dは製品の単独資料であり、製品として住居（遺跡）内に持ち込まれたと考えられる。

それでは、遺跡内において具体的にどのような石器製作が行われたのであろうか。個体別資料No. Aは接合例が8例みられるが、このことは必ずしも、遺跡内で連続的な剥片剥離が行われたことを示すものではない。むしろ、住居内に集中部を形成するといった出土状況から、製品および素材の搬入・使用・保管を中心していると考えられる。断片や蔽石の出土がみられないことも、このことを傍証している。

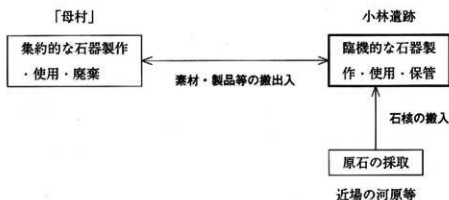
小林遺跡では未調査部分があるものの、堅穴住居跡は1軒のみであり、前述したように定住的な集落跡とは考えにくい。一定期間の狩猟などを目的とした、より臨機的な場とはいえないだろうか。いわゆる「母村」が別の場所にあると推測され、そこから必要最低限の装備が当該地区に持ち込まれたと思われる。個体別資料No. Aがどのような状態で遺跡内に搬入されたのか復元することは不可能であるが、石核の状態で搬入される以外に、製品や素材としてあらかじめ「母村」で用意された状態で搬入された蓋然性が高い。消費し尽くされた剥片素材の残核は、遺跡内で実際に行われた臨機的な剥片剥離を示しているといえる。また、個体別資料No. Bの残核は、大形で節理や夾雑物が多く混入しており、非常に石質が悪い。したがって、「母村」から搬入されたものとは考えにくく、小林遺跡周

辺で採取された原料とおもわれる。

以上に見た限定的な石器製作のあり方は遺構外出土石器群についてもいえる。また、加工具に対して狩猟具の比率が非常に低く、「場の機能」を推測するには示唆的である（第35図）。しかし、石器製作で生じる残滓と違って、道具自体は使用にともなって頻繁に持ち運ばれるため、組成のみから「場の機能」を推測するのは危険であり、とくに生産活動の痕跡がさほど累積しない小規模な遺跡では慎重に検討しなければならないだろう。

このように、本遺跡では各個体に対する石器製作が限定的に遂行されていたことがわかる。換言すれば、石器製作・使用は小林遺跡で完結せず、他の場（集落・遺跡）とのつながりのなかで進行しているのである。

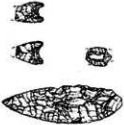
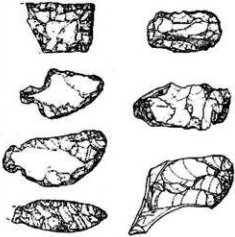
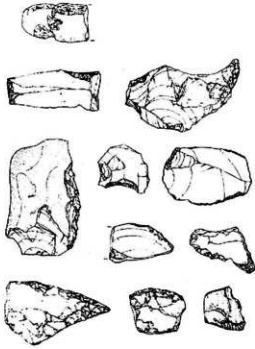
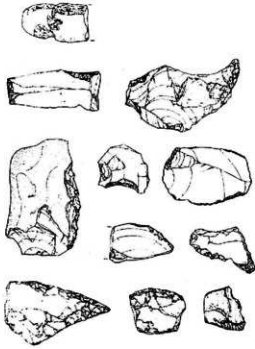
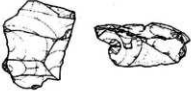
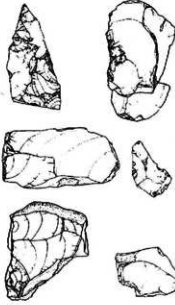
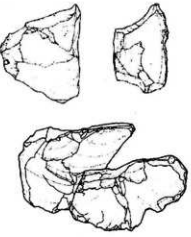
以上から、下図に示す石器原料と製品の動きを導くことができるが、限られた資料からの推測の部分が多いことは否めない。



第34図 素材・製品の搬出入模式図

【参考文献】

- 註1 宮城県教育委員会 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ－大梁川・小梁川遺跡－』 宮城県文化財調査報告書第126集 1988(平成元)年
- 註2 会田容弘 「縄文時代の頁岩製石刃製作と流通－東北地方南部のありかた－」 『山形考古－加藤稔会長古稀記念論集－』 第6巻第4号 山形考古学会 2000(平成12)年
- 註3 秋田県教育委員会 『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る発掘調査報告書Ⅲ－盤若台遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第319集 2001(平成13)年
- 註4 吉川耕太郎 「上部旧石器時代遺跡の研究－遺跡構造論とその周辺－」 『研究紀要』 第16号 秋田県埋蔵文化財センター 2002(平成14)年

	狩猟具		主な加工具	
	石槍・石鏃	定型的な石器（石匙・石腕・撻器等）	不定型的な石器（削器・二次加工ある剥片等）	
製品				
残片				

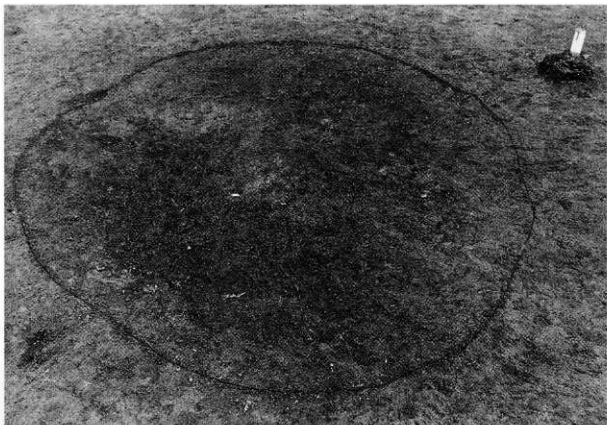
第35図 遠構外出土石器組成図



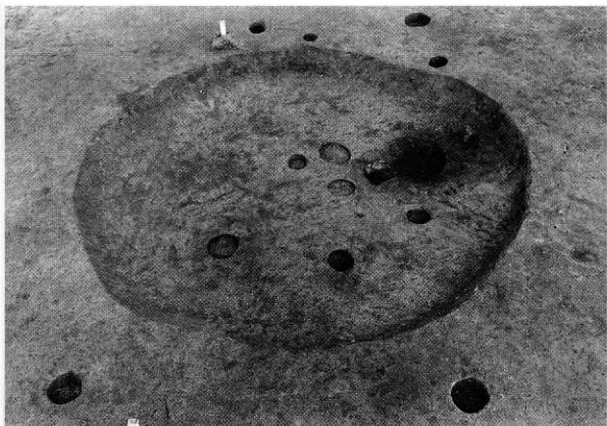
遺跡全景（南から）



作業風景（北西から）



S I 1904確認状況（南から）



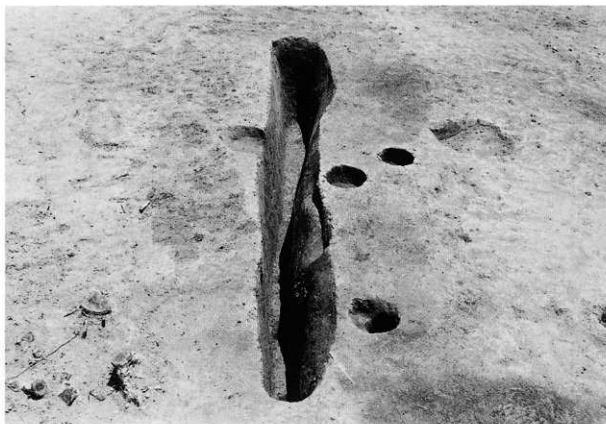
S I 1904完掘状況（西から）



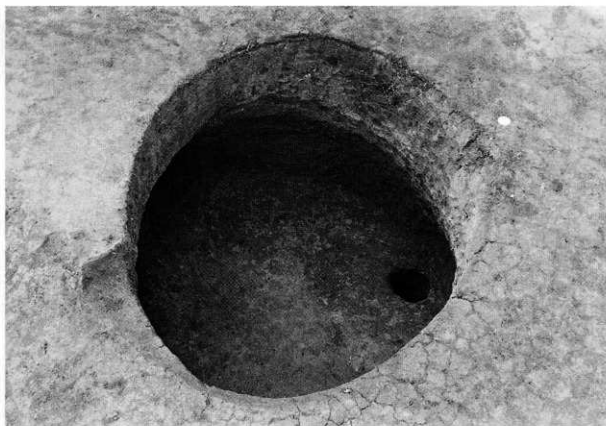
S I 1904 炉跡検出状況（北から）



S I 1904 石器集中部検出状況（東から）



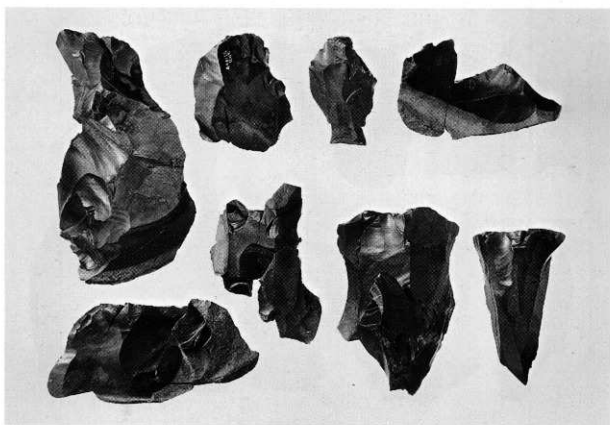
S K T 121完掘状況（西から）



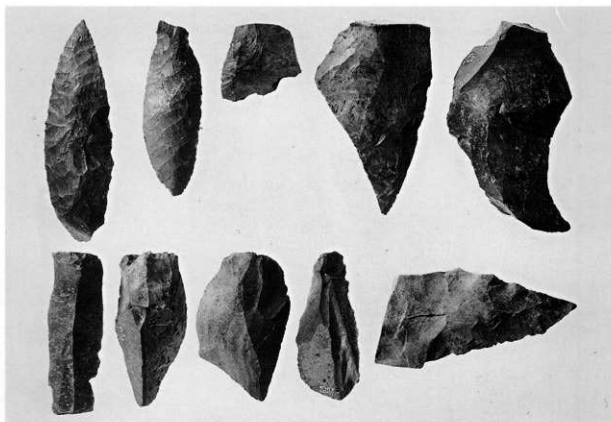
S K F 93完掘状況（南から）



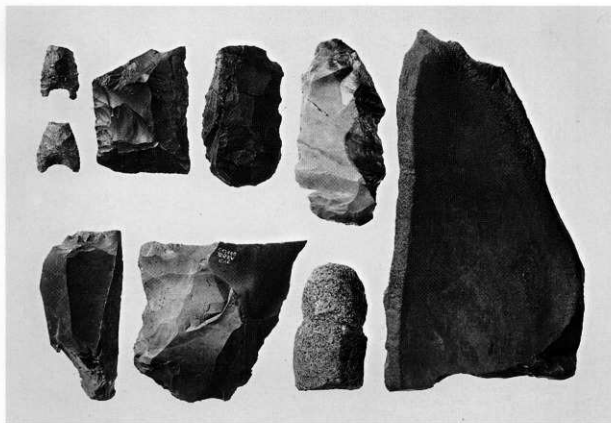
S I 1904出土土器



S I 1904出土土器（個体別資料No.A）



遺構外出土石器（個体別資料No.3）



遺構外出土石器（単独個体）

報告書抄録

ふりがな	こばやしいせき							
書名	小林遺跡							
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XIV							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第344集							
編著者名	吉川耕太郎・渡邊慎一							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 TEL0187-69-3331							
発行年月日	西暦2002年7月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
こばやし 小林遺跡	あきたけんやまもとぐん 秋田県山本郡 こまやまうちいかわあが 琴丘町廻川字 こばやし 小林39外	05341		40° 00' 12"	140° 5' 33"	20000424 20001102	14,300m ²	日本海沿岸 東北自動車 道建設事業 に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小林遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 陥し穴状土坑 フラスコ状土坑		縄文土器 石器		縄文時代と平安時代の複合 遺跡。縄文時代の遺構・遺 物は中期が中心（平成14年 度報告）。小規模な集落跡。 平安時代は、10世紀前後の 製鉄関連の集落跡（平成15 年度報告予定）。	
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡・欄列 製鉄炉 鍛冶炉 炭窯 土坑 柱穴様ビット		土師器 須恵器 土錘 鉄製品 鉄滓			

秋田県文化財調査報告書第344集
小 林 遷 跡 I 縄文時代編
ー日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書XIVー

印刷・発行	平成14年7月
編 集	秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町弘田字牛嶋20番地 電話 0187 (69) 3331 FAX 0187 (69) 3330
発 行	秋田県教育委員会 〒010-8580 秋田市山王3丁目1番1号 電話 018 (860) 5193 FAX 018 (860) 5886
印 刷	株式会社 江川印刷所

